

平成16年度（第48回）

岩手県教育研究発表会発表資料

外 国 語

高等学校の学習指導改善に関する研究

- 指導に生かす評価の工夫をとおして -

研究協力校

岩手県立花巻南高等学校

研究協力員

岩手県立盛岡北高等学校 教諭 舟山 美知

平成17年2月9日
岩手県立総合教育センター
教科領域教育室
遠 藤 毅

《 目 次 》

研究目的	1
研究仮説	1
研究の年次計画	1
本年度の研究の内容と方法	1
1 研究の目標	1
2 研究の内容	2
3 研究の方法	2
4 研究の対象	2
研究結果の分析と考察	2
1 高等学校において育成すべき英語力の目標の具体化	2
(1) 英語力及び英語力を育成する意義	2
(2) 「英語力の目標」の設定	3
2 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画	5
(1) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案	5
(2) 目標に準拠した評価と評価結果のフィードバック	7
(3) 評価の時期・方法・用具のとらえ方	7
(4) 評価活動の実施とその蓄積	8
(5) 評価活動と評価結果のフィードバック及び評価結果の蓄積	9
(6) 検証計画及び調査計画	10
3 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価を位置付けた授業実践と実践結果の分析と考察	10
(1) 英語力の判定と英語力の育成状況の分析	1
0 (2) 「私の英語力の目標」への記述による分析	
15 (3) 手だてに関する授業担当者の意識	
15 (4) 手だてに関する生徒の意識	16
4 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ	17
(1) 成果	17
(2) 課題	18
外国語科の研究のまとめ	18
1 研究の成果	18
2 今後の課題	18

おわりに

【参考文献】

【参考 Web ページ】

【補充資料】

研究目的

『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」は、経済・社会等のグローバル化が進展する中、子どもたちが21世紀を生き抜くために、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることの必要性を提唱している。そこで、高等学校の英語科の学習指導においては、英語を使って情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりできる実践的コミュニケーション能力を育成することが求められている。そして、このねらいを実現するためには、生徒の英語力を多面的に評価し、評価結果を日々の指導に生かすことが重要である。

しかし、言語材料の知識・理解のみならず、表現力などを把握する評価が工夫されてきてはいるものの、評価結果が生徒の自己実現に結び付いているとはいえない。これは、生徒に身に付けさせたい英語力のとらえが明確ではないことと、効率的に評価を進めようとするために、評価の妥当性が高まっていない状況があるためと考えられる。

このような状況を改善するためには、高等学校において育成すべき英語力を明らかにし、それが身に付いているかどうかを適切にとらえる評価方法を工夫し、その評価結果を指導に生かして、生徒が意欲をもって学習に取り組めるようにすることが必要である。

そこで、この研究は指導に生かす評価方法を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、英語力を育成する高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の充実に役立てようとするものである。

研究仮説

高等学校において育成すべき英語力を明らかにし、実際の目的のために英語を使う能力を適切にとらえる評価方法を工夫し、生徒の英語活動の評価結果を継続的にフィードバックする学習指導を行っていけば、生徒の英語力が育成されるであろう。

研究の年次計画

この研究は、平成15年から平成17年にわたる3年次研究である。

第1年次（平成15年度）

英語力を育成する高等学校の学習指導に関する基本構想の立案、実態調査、学習指導の試案の作成

第2年次（平成16年度）

高等学校において育成すべき英語力の目標の具体化、指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画の作成、授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

第3年次（平成17年度）

指導と評価の計画に基づく授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

本年度の研究の内容と方法

1 研究の目標

高等学校において育成すべき英語力を具体化し、指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画を作成する。それに基づき授業実践を行い、その結果の分析と考察をとおして、試案に基づく外国語科の指導と評価の計画の妥当性を検証する。

2 研究の内容

(1) 高等学校において育成すべき英語力の目標の具体化

英語を使って実際に何ができるかを明らかにし、何ができることを目標にすべきかについて、妥当性の高い海外の資料や国内の各種資格試験等の英語力の目安を参考にしながら、高等学校において育成すべき英語力の目標を具体化する。

(2) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画の作成

昨年度作成した試案に基づき、英語力を判定した上で、自己評価や相互評価を取り入れながら、高等学校外国語科において「英語力」を適切にとらえるための、目標に準拠した評価を位置付けた指導と評価の計画を作成する。

(3) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価を位置付けた授業実践と実践結果の分析と考察

生徒の英語力を分析した上で、指導と評価を位置付けた授業実践を行い、その結果について、事前・事後の英語力の比較、教科担当者及び生徒へのアンケートをもとに、分析・考察を行う。

(4) 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ

授業実践結果の分析と考察をもとに、その成果と課題をまとめ、高等学校における、指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価の計画の妥当性について明らかにする。

3 研究の方法

(1) 文献法及びテスト法

主題にかかわる先行研究や文献等を参考にして、高等学校において育成すべき英語力の目標を具体化し、テストによって英語力の判定を行うとともに、目標とすべき英語力育成のための、指導に生かす評価方法を検討する。

(2) 授業実践

高等学校外国語科の指導と評価の計画を用いた授業実践を行い、生徒の英語力を高める指導と評価に関する仮説の有効性を確かめる。

(3) 質問紙法

教科担当者及び生徒に対して質問紙による調査を行うことによって、手だてに関する意識の調査を行う。

4 研究の対象

研究協力校 県立花巻南高等学校

研究結果の分析と考察

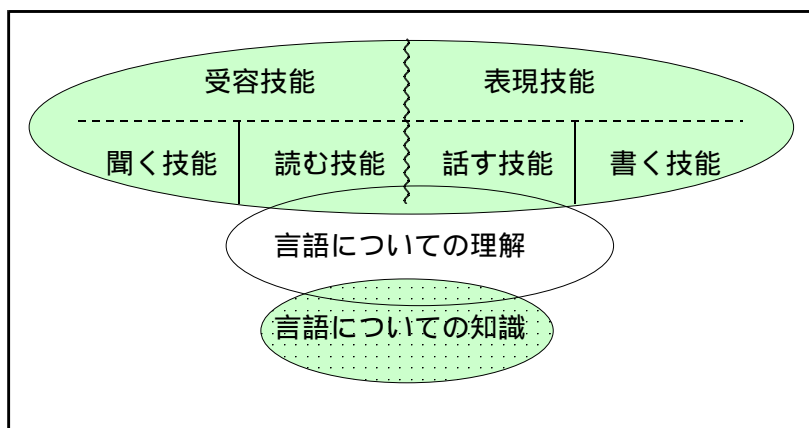
1 高等学校において育成すべき英語力の目標の具体化

(1) 英語力及び英語力を育成する意義

本研究における英語力とは、第1年次に明らかにしたように、学習指導要領における英語の学力のとらえ方と、「英語が使える日本人育成のための行動計画」(以下、行動計画と呼ぶ)が示す英語力を基に、【図1】のように、「言語の知識を基盤とし、英語の音声や文字を使用して、情報や相手の意向を受容することができる技能と、自分の考えや意向を表現することができる技能」ととらえる。

また、英語力を育成する意義は、将来を担う生徒一人一人が、国際社会の一員として共に生

きていくための資質や能力を身に付け、国際語としての英語の知識・技能を総合的に用いるスキルを育成することにある。



【図1】本研究における英語力

(2) 「英語力の目標」の設定

新学習指導要領が求めている「実践的コミュニケーション能力の育成」、そして行動計画における「中学校卒業段階で英語検定3級程度」「高等学校卒業段階で英語検定2級から準2級程度」は最終的な目標ではあるが、生徒の発達段階に応じてどのような英語力を身に付けさせるべきかの見通しを持ち、「英語を用いて、どのような場面で、どのようなことができるのか」を明らかにし、実際に英語力を判定した上で、目標とすべき英語力を設定する必要がある。

そこで、本研究では、英国のナショナルカリキュラム（詳細は【補充資料1】参照）を参考にし、資格試験（英検）及び高等学校・大学の入学試験を関連付け、研究協力校における生徒の英語力を分析することによって、高等学校において育成すべき英語力の目標を設定する。

英国のナショナルカリキュラムは、長期に渡って教員がボトム・アップの形で作成してきたこと、全国的な修正を三度経ており妥当性が高いことの二つの理由から、言語の発達段階のモデルとして信頼性が高い。ナショナル・カリキュラムは、言語の発達段階として、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の四つの技能ごとに九つのレベルを設定している。

このナショナルカリキュラムにおける四つの技能と九つのレベルの記述内容から、日本の高校生が目標とすべき英語力を具体的に想定し、英語検定や各種入試問題と対応させたものが「英語力の目標」（以下、「目標」と呼ぶ）である。作成に当たっては、「聞くこと」と「読むこと」は英語検定の過去問題を使用し、「話すこと」と「書くこと」は各レベルの想定される英語力に見合うようなタスクを設定した。また、各学年（年度）での実施、あるいは年度内に複数回実施することを想定し、同程度の難易レベルのものを三種類作成した。（詳細は【補充資料2】を参照）

語彙レベルの測定には、ニュージーランドのビクトリア大学応用言語学教授ポール・ネイションが作成した語彙レベル判定ソフトを用い、「読むこと」については検定試験や入学試験問題の語彙レベルと相応する英文を採用した。

ネイションによる語彙レベル判定ソフトは、RANGE and FREQUENCY Program と呼ばれるもので、日常的に最も頻繁に用いられる1,000語を BASEWORD1、次に頻繁に用いられる1,000語を BASEWORD2、それ以外で高等学校と大学レベルで用いられる2,000語を BASEWORD3と設定している。BASEWORD1は、分析に用いた500万語につき332回以上用いられた語から成り、リストにあるすべての単語は、その派生形と活用形も含んで1語と数え、英米両方の綴りを含む。

その結果、BASEWORD1には延べ約4,000語が含まれている。このソフトは、他の同様の語彙分析ソフトのモデルになっているものであり、分析語数が多く、派生語なども含めた語彙のとらえ方が分かりやすいことから、十分な客観性と信頼性を有するものと判断し、本研究での語彙分析に使用した。

【表1】は、この分析ソフトのBASEWORD1/2/3における語彙リストの最初の部分である。

【表1】 RANGE and FREQUENCY Programの語彙リスト

BASEWORD 1	BASEWORD 2	BASEWORD 3
A / AN	ABROAD	ABANDON / ABANDONED
ABLE / ABILITY / ABLER / ABLEST	ABSENCE / ABSENCES / ABSENT	ABANDONING / ABANDONS
ABLY / ABILITIES / UNABLE	ABSOLUTE / ABSOLUTELY	ABSTRACT / ABSTRACTION
INABILITY	ACCIDENT / ACCIDENTS	ABSTRACTIONS / ABSTRACTLY
ABOUT	ACCIDENTAL / ACCIDENTALLY	ABSTRACTS
ABOVE	ACCUSE / ACCUSING / ACCUSES	ACADEMY / ACADEMIA / ACADEMIC
ACCEPT / ACCEPTABILITY /	ACCUSED	ACADEMICALLY / ACADEMICS
ACCEPTABLE / UNACCEPTABLE	ACCUSTOM / ACCUSTOMS	ACADEMIES
ACCEPTANCE / ACCEPTED	ACCUSTOMING / ACCUSTOMED	ACCESS / ACCESSED / ACCESSES
ACCEPTING / ACCEPTS	ACHE / ACHING / ACHES / ACHED	ACCESSIBILITY / ACCESSING
ACCORD / ACCORDED / ACCORDANCE	ADMIRE / ADMIRING / ADMIRES	INACCESSIBLE
ACCORDING / ACCORDINGLY	ADMIRED / ADMIRABLE	ACCOMMODATE / ACCOMMODATED
ACCORDS	ADMIRATION	ACCOMMODATES / ACCOMMODATING

【表2】は、このソフトを用いて英文の語彙レベルを判定したものである。表中の[WORD LIST (one/two/three)]は語彙レベル (BASEWORD1/2/3)、[TOKENS]は英文に含まれる語数、[TYPES]は実質語数 (複数回用いられているものを1語と数える) をそれぞれ表す。

【表2】 RANGEソフトによる語彙分析結果

WORD LIST	TOKENS / %	TYPES / %
one	297 / 83.9	131 / 79.9
two	14 / 4.0	7 / 4.3
three	8 / 2.3	7 / 4.3
not in the lists	35 / 9.9	19 / 11.6
Total	354	164

この表は、2004年度の大学入試センター試験第4問を分析した結果であるが、総語数354語中、BASEWORD1に含まれる語は297語で全体の83.9%、実質語数164語中、BASEWORD1に含まれる語は131語で全体の79.9%であることを示す。

「目標」の作成に際しては、各レベルとそれに対応する英語検定、各種入試問題等の英文の難易度を同程度のものに設定する必要がある。【表3】は、本研究において英文の難易度を語彙のレベルから判定する方法であり、「英文難易指数」(以下、指数と呼ぶ)と呼ぶこととする。指数が高いほど、語彙面から見てその英文が難解であることを示す。併せて、大学入試センター試験の難易度を「標準」と設定した、指数に応じた難易度の目安を示す。

【表3】 英文難易指数と難易度の目安

難 易 指 数	指数 (Q) = ((A / B) / C) / D	
	「注」 A : 実質語数 B : 総語数 C : 実質語数の BASEWORD1レベル率 / 100 D : 総語数の BASEWORD1レベル率 / 100	
難 易 度	2004年度大学入試センター試験第4問 Q = ((164 / 354) / 0.799) / 0.839 = 0.691 (小数点以下第4位を四捨五入)	
	~0.449	易 (~高校入試レベル)
	0.450~0.549	やや易 (英語 教科書レベル)
	0.550~0.749	標準 (英語 教科書、センター試験、国公立大学標準レベル)
	0.750~0.849	やや難 (国公立大学難関レベル)
0.850~	難 (国公立大学超難関レベル)	

【表4】は、「目標」各レベルの英文（「読むこと」の三回分）、平成16年度の各種大学入試問題及び岩手県高等学校入学者選抜学力検査（高校入試）の問題の指数の一覧である。併せて、中学校三年生用教科書と高校の英語・英語の教科書の指数を参考として示す。

【表4】各英文の難易指数

*「英語力の目標」の難易指数は左から第一回、第二回、第三回のもを示す				
英語力の目標	H16 センター試験	国公立大学個別試験(前期)	参考：中学校・高校教科書	
英文 難 易 指 数	レベル4： 0.743 / 0.741 / 0.735 (平均語数253語)	第3問C：0.787(303語) 第4問：0.691(354語) 第5問：0.559(447語)	中学校教科書(本編全体) A社：0.337(4191語) B社：0.291(5954語) (県内で使用中の二種類)	
	レベル5： 0.817 / 0.800 / 0.832 (平均語数284語)	第6問：0.599(706語) 第3問～第6問全体： 0.659(2082語)		高校教科書(各課の平均) 英語(A社)0.603 (平均語数687語) 英語(B社)0.625 (平均語数626語)
	レベル6： 0.854 / 0.835 / 0.877 (平均語数342語)	(参考)H17 センター試験 第3問C：0.908(309語) 第4問：0.851(418語) 第5問：0.575(460語)	英語(A社)0.634 (平均語数766語) 英語(B社)0.721 (平均語数812語)	
	レベル7： 1.404 / 1.210 / 1.203 (平均語数434語)	第6問：0.573(732語) 第3問～第6問全体： 0.727(2324語)		高校入試 第6問：0.598(377語) 第7問：0.408(434語)

指数の算出に当たっては、語彙の偏り等に左右されず、信頼度を増すためには、ある程度以上の語数を含む英文（概ね250語以上を目安とする）である必要がある。【表4】で取り上げた各英文はこの条件を満たすものである。ただし、条件を満たす長文を問題文として出題している大問に限った分析であり、必ずしも試験全体の難易度を表すものではない。

大学入試センター試験の長文読解問題は、4題での指数の平均が0.659となり、難易度の「標準」の中央に位置付けられる。今年度の高校入試問題第6問は、指数の上では「標準」に位置付けられるが、問題文中の17語について語注が付けられており、それらの語を除いた英文の難易指数は0.504である。岩手大学の問題は、教育学部・人文社会科学部ともに指数が高く、語彙的には難問であったことがわかる。「目標」における各英文の指数は全体的に高めであり、レベル6（英検2級程度）の読解用の英文はセンター試験の評論文（第3問）や東北大学の入試問題に匹敵する難易度であることがわかる。

以上の、ナショナルカリキュラムの九つのレベルを基に想定した英語力と、語彙レベルの分析から、本研究における「英語力の目安」を次頁の【表5】のように設定した。

2 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画

(1) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案

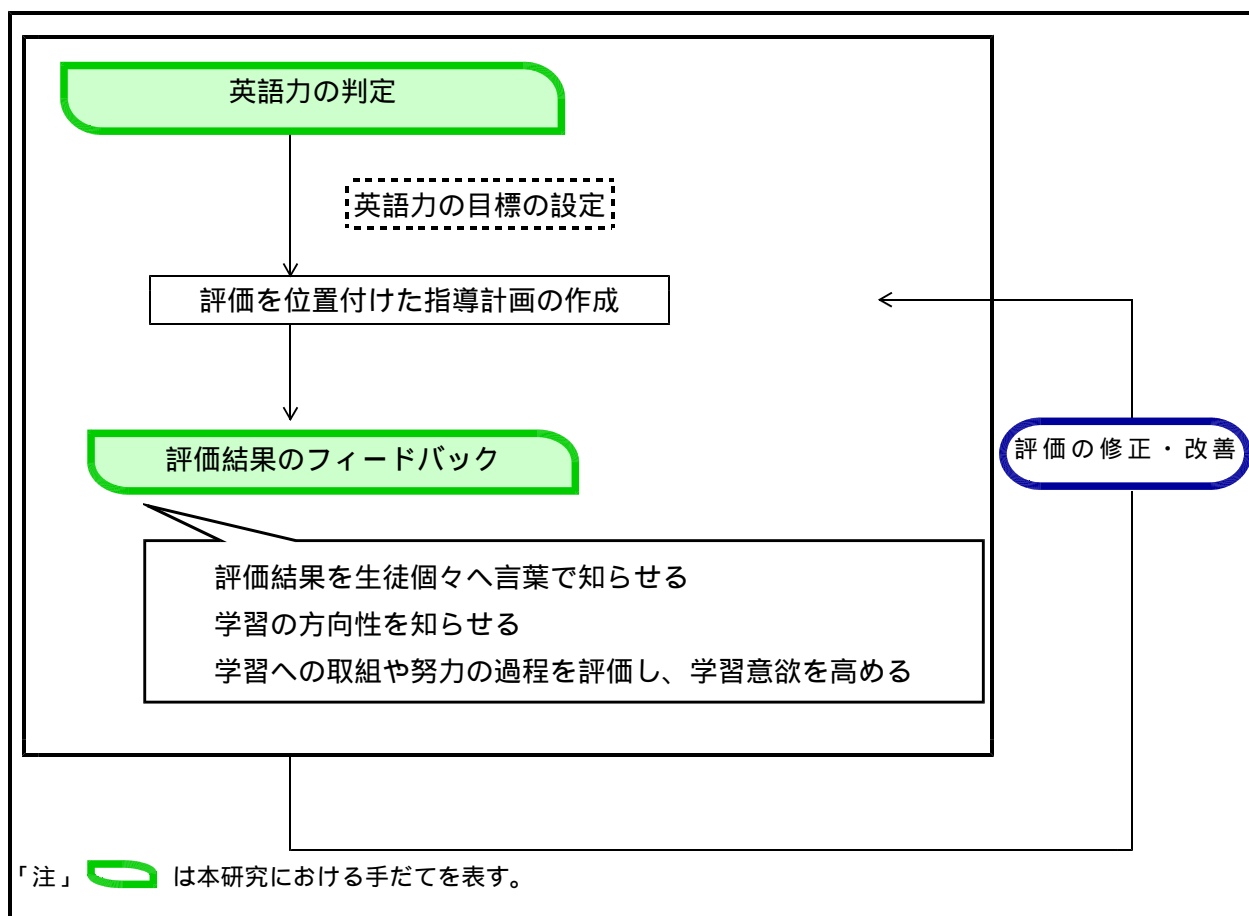
次頁の【図2】は、昨年度作成した試案に修正を加え、指導に生かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案をまとめたものである。修正を加えた点は、第一の手だてである「英語力の判定」の部分である。昨年度は、「英語力の発達の見通し」として、「書くこと」についてレベル1からレベル7までの発達の見通しを作成したが、英語の四技能は相互に関連・影響し合いながら総合的に発達するものであるとの考えから、前述の「目標」を用いた判定へと発展させた。

第一の手だてである「英語力の判定」は、「目標」によって生徒一人一人の英語力を判定することで、現時点での力を把握して動機付けとし、次のレベルに進むための目標を持たせることがねらいである。この判定結果を受けて、評価を位置付けた指導計画を作成した。第二の手だてである「評価結果のフィードバック」では、生徒の自己評価、相互評価と教科担当者による評価を

継続的に実施し、その結果を生徒にフィードバックすることにより学習意欲を高め、英語力の向上を目指すものである。

【表5】英語力の目安

各レベルと英語力の目安						
	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	英検・語彙数	入試問題
レ	習った単語を正しき聞き分ける	見たものを習った単語レベルで描写する	習った単語を読んで理解する	習った単語を正確に書き写す	200語	高 校 入 試 セ ン タ ー 二 次 考 査 標 準
レ	習った文を聞き分けて理解する	見たものを簡単に述べ、決まり文句が使える	習った単語を音読でき、短い文を理解する	短い文を正確に書き写す	5級 600語	
レ	簡単なあいさつや自己紹介などを聞き取れる	簡単な自己紹介や日常のあいさつをする	短い文章の要点を読み取り、辞書などを用いる	正しい文字の使い方がわかり、簡単な手紙を書く	4級 1300語	
レ	道案内や日常に関する伝言を聞き取る	他人の紹介をし、簡単な道案内をする	簡単な手紙や掲示板、説明書を読み取る	簡単な日記を書いたり、日常の描写をする	3級 2100語	
レ	日常なことについての電話の内容を聞き取る	自分のことを電話で伝え、簡単な報告をする	簡単な新聞記事やパンフレットを読んで理解する	日常の体験や予定などを簡単に説明する	準2級 3600語	
レ	やや抽象的な説明や事務的な電話内容を聞き取る	一般的事柄について説明し、簡単な通訳をする	簡単な小説や興味ある分野の記事を読み取る	趣味などの事柄を説明的にや長い文章で書く	2級 5100語	
レ	テレビ・ラジオなど放送・報道の概要を理解する	社会的出来事の概要を説明し、幅広く通訳をする	幅広く読書し、新聞や辞典の情報を的確に捉える	会議の記録をとり、自分の見解の概要を書き表す	準1級 7500語	
レ	各種放送や演説・討議などを十分理解する	通訳や電話での折衝をし、報道内容を的確に伝える	新聞、雑誌、一般文献など十分に理解する	自分の意思、見解や演説原稿を十分に書き表す	1級 1万～1.5万	
レ	あらゆる英語を十分に聞いて理解する	あらゆる場面で正確かつ適切に話す	専門書を含め英語を読むことに不自由しない	適切な文体や専門用語を駆使して書く	1.5万～	



「注」 英語力の判定 は本研究における手だてを表す。

【図2】指導に生かす評価方法の工夫を図る学習指導の試案

(2) 目標に準拠した評価と評価結果のフィードバック

ア 高等学校における評価の現状と課題

目標に準拠した評価（観点別評価規準に基づく評価）や指導と評価の一体化という考え方に
基づく授業や評価の在り方についての教員の意識に関して次のような課題が指摘されている。

- ・高校では数十年間にわたって「絶対評価」による評価が行われてきているため、評価規準作
成の必然性が感じられない。
- ・座学中心の教科（科目）にあっては、評価や評定に際し、定期考査での評価に大きな比重が
あり、單元ごとに評価規準を設定して評価するという発想そのものがない。
- ・評価の最大の目的としての「指導改善」という意識が希薄である。

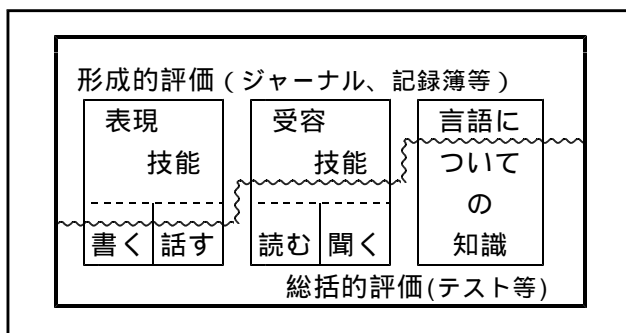
また、生徒の実態としては、各教科（科目）における自らの目標が曖昧なまま、受け身の授
業が多く、自分で考えて学ぶ姿勢に欠ける者が多い。

イ 目標に準拠した評価と評価結果のフィードバック

高等学校における目標に準拠した評価の在り方や評価規準の作成に関し、県としての統一し
た方針が出されていない現状においては、既に目標に準拠した評価を推進している学校（県内
で数校程度）から全く着手していない学校（大部分の学校）まで、各校における取り組み状況
には大きな差があり、教員の意識をはじめ、学校全体の態勢が整っていないところがほとんど
であることから、中学校で実施されているような、評価規準の作成と単位時間ごとのABC評
価の実施は困難と考える。

そこで本研究では、プログレスレポートの作成という視点から、目標に準拠した意図的な評
価を行い、その評価結果を継続的に生徒にフィードバックすることにより、生徒の英語力の育
成と学力の向上に資するような評価の在り方をさぐる。それにより、形成的評価の有効性や、
評価が指導改善に結びつく可能性と、目標に準拠した評価計画の作成の意義について提起して
いきたい。

英語の受容技能（「読む」「聞く」）の評
価については総括的評価を重視し、表現
技能（「書く」「話す」）の評価については
形成的評価を工夫しながら過重な負担に
ならないような配慮も必要である。【図3】
はその考えを示したものである。



(3) 評価の時期・方法・用具のとりえ方

【図3】形成的評価と総括的評価

評価結果を継続的にフィードバックする方法においては、一連の学習過程の中で、必要に応じ
て複数回評価を行うことになる。話す技能については、主として授業中に生徒の言語活動への取
組状況を評価することが実用的であるし、書く技能については、主として授業後に生徒が作成し
た作品を評価することが適切である。また、「読む」「聞く」の受容技能と言語についての知識の
評価については、小テストやペーパーテストで英語力の変容をとらえることができる。その際、
学習に用いた教科書や教材の知識が身に付いているかどうかだけを評価対象にするのではなく、
学習指導目標と評価対象が一致するように評価の妥当性を高める必要がある。「書く」「話す」の
産出技能の評価については、ジャーナル・ワークシート・ノート・パフォーマンスなどを用いる
ことが適切である。次頁【表6】は、以上をふまえ、評価の時期・方法・用具のとりえ方をまと

めたものである。

【表6】評価の時期・方法・用具のとりえ方

評価方法 評価用具	評価の時期			評価者		何を				
	授業前	授業中	授業後	教師	生徒	受容技能		表現技能		言語についての知識
						聞く	読む	話す	書く	
リスニングテスト										
ペーパーテスト										
観察										
ジャーナル										
ワークシート										
ノート										
パフォーマンス										
ビデオ										
音声カセット										
自己・相互評価										

「注」 印は、特に適した評価方法や評価用具を示す。

(4) 評価活動の実施とその蓄積

評価にあたっては、教科担当者による一方的な評価のみならず、生徒による自己評価と相互評価を取り入れた。自己評価は、自らの基準により自分の学習状況を評価するものであり、自己教育力の育成という観点から見て重要な評価方法である。また、相互評価は、生徒が互いに学習成果を評価し合うものであり、学習内容の理解とあわせて授業への主体的参加を促す効果が期待できる。高等学校では自己評価や生徒同士による相互評価を実施する機会が少なく、将来的な活用の可能性を探るといふ点からも大きな意義のある活動と考える。

評価は、国立教育政策研究所が作成した評価規準を参考に、四技能ごとに観点別に行った。ただし、技能によっては評価の観点が三つ（「聞くこと」については「表現」の観点は評価しない）であることから、すべての技能について三観点ずつの評価とし、生徒にも判断しやすい項目を選択した。また、短時間で効率的に評価する必要性から、評価は三段階とした。基本的には、各単元終了ごとに実施し、その結果を一覧にまとめて保管する。

一覧へのまとめの際には、反省点と次回への目標を記入し、次の学習に生かすようにした。教科担当者による評価は、「聞く・話す」と「読む・書く」に二分し、三段階での評価とともに、必要に応じてコメントを加えて返却した。次頁の【資料1】は、定期的実施した「自己評価・相互評価・担任評価表」の、【資料2】は「評価記録表」の一部である。（「英語」の評価規準は【補充資料3】、各表の詳細は【補充資料4】を参照）

「目標」による英語力の判定実施後に、自己評価・相互評価による評価活動を実施することを予告し、相互評価に当たっては、ペア活動やグループ活動の際に互いに観察して評価し合うこと、可能な項目について評価することを確認した。

教科担当者による評価については、日常的に行ってきた各種の評価（授業中の観察、ノートへのコメント、ワークシートの評価、小テスト等）は継続しながら、それらの単元ごとの総括という位置付けとして、評価表への記入と生徒へのフィードバックを行ってもらった。評価の欄のコメントは、評価の観点の中で、特に高く評価できる活動が見られた場合と、逆に大きな努力を要すると判断された場合に記載することとした。

【資料1】自己評価・相互評価・担任評価

英語活動評価表								
	評価項目	自己評価			相互評価			教科担任評価とコメント
聞 く こ と	・聞いた内容の要点を理解する	3	2	1	3	2	1	
	・関心を持って相手を見て話を聞く	3	2	1	3	2	1	
	・理解できない部分も推測して聞く	3	2	1	3	2	1	
	[評価の平均]							
話 す こ と	・間違いを恐れず自分の考えを話す	3	2	1	3	2	1	
	・学んだ表現を進んで使って話す	3	2	1	3	2	1	
	・正しい文法やリズムで話す	3	2	1	3	2	1	
	[評価の平均]							

【資料2】評価記録表

英語活動評価記録表								
実施日	項目	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	教科担任	今回の反省と次回までの目標	検 印
	自己							
	相互							
	自己							
	相互							
	自己							

(5) 評価活動と評価結果のフィードバック及び評価結果の蓄積

評価用紙を用いての評価活動は、「目標」による第一回の英語力判定実施後である、8月末から11月末までの期間内、二つの学年（1学年・2学年）・二つのコース（普通科・国際科）の三学級で行われた。評価の期間は、それぞれの学年・コースの学習内容と指導内容の違いにより、短い期間で一ヶ月半、長い期間で3ヶ月、評価の回数は、3～6回となった。次の【資料3】はその記入例の一部を内容と量の面で平均的なもので示したものである。

【資料3】評価記録表の記入例

実施日	項目	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	教科担任	今回の反省と次回までの目標	検 印
9月 2日	自己	2	2	2	2	2	自分の考えを使って話せるようになる	○
	相互	2	2	2	2			
9月 9日	自己	1	2	2	1	2	聞いた内容が理解できるようになる	○
	相互	2	2	2	2			
10月 1日	自己	2	2	2	3	2.5	正しい発音ができるようになる	○
	相互	3	2	3	3			

* 「次回への目標」を簡潔に記入し、努力目標とする。

すべての生徒が反省と目標の欄に何らかの記述をし、目標を持って学習を進めた（少なくともその意思があった）ことがわかる。自己評価は、自分に甘い・厳しいの差によって多少の違いが

見られるが、相互評価は概して甘くなっている。

(6) 検証計画及び調査計画

ア 検証計画

本研究における手だてが有効であるかどうかを確かめるために、検証計画を【表7】のように作成した。

【表7】検証計画

検証項目	対象	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
英語力の育成状況	生徒	各自の英語力の目標の設定状況と英語力の伸び	テスト法 質問紙法 (自由記述による調査)	事前・事後に「英語力の目標」により自己判定した英語力を比較・分析する 各自がたてた英語力の目標を分類・分析する
授業実践に関する意識	教科担当者	手だてに関する意識	質問紙法 (多肢選択及び自由記述による調査問題)	手だてに関する意識を、授業実践後に調査し、総合的に分析・考察する

イ 調査計画

指導の手だてが生徒にどのように受け止められたかを確かめるために、授業実践後に調査を行う。【表8】は、その調査計画である。

【表8】調査計画

調査項目	対象	調査内容	調査方法	処理・解釈の方法
外国語科の学習及び評価結果を用いた授業についての意識	生徒	手だてに関する意識	質問紙法 (多肢選択及び自由記述による調査問題)	事後に調査を行い、総合的に分析・考察する

3 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価を位置付けた授業実践と実践結果の分析と考察

(1) 英語力の判定と英語力の育成状況の分析

ア 英語力の判定

英語力を判定し、次のステップへの目標を定めるために、「目標」を利用し、授業時間中に教科担当者の指示のもとに判定を行った。第一回の実施は平成16年8月24日、実施の対象は県立花巻南高等学校第1学年一学級(男子13名、女子26名、計39名)と第2学年二学級(男子10名、女子66名、計76名)であり、第二回の実施は、三か月にわたる評価活動実施後の、平成16年12月16日、実施の対象は同校第1学年二学級(男子28名、女子50名、計78名)と第2学年二学級(男子12名、女子67名、計79名)である。両回とも予告なしで実施した。第二回の実施対象中、第1学年の一学級と第2学年の二学級は第一回と同じ対象であり、「目標」のレベル設定の妥当性を見る。第二回の実施対象中、第1学年の一学級は、第二回が初めての実施であり、

評価活動を経た実験群との比較により、実験群における英語力の育成状況を分析する。

英語力の判定にあたっては、「聞くこと」は教科担当者による読み上げ、「読むこと」は制限時間を設定した読み取り、「話すこと」と「書くこと」は各生徒のペースでの取り組みとし、【資料4】の診断表を用いた自己診断によることとした。実施後には、自己診断結果を受けての「私の英語力の目標」を記入させた。（「診断表」の詳細は【補充資料5】を参照）

【資料4】英語力診断表

英語力診断表																	
	聞くこと				話すこと				読むこと			書くこと			目安		
レベル1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	
レベル2	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	5級
レベル3	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4級
レベル4	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	3級

* 各評価の判断基準は [4] 完全にあるいはほとんどできる [3] 半分以上はできる
[2] 半分まではできない [1] 全くあるいはほとんどできない

私の英語力の目標

イ 英語力の判定の分析と考察

【表9】は、この診断表を用いての第一回の自己診断結果である。「平均」は、自己診断（四段階）の平均値であり、それぞれの欄の上段は「聞くこと」と「読むこと」の平均値、下段は「話すこと」と「書くこと」の平均値である。「聞くこと」と「読むこと」は、実際に聞いたり読んだりして理解度を確認しているが、「話すこと」と「書くこと」は、設定されたタスクを実際に行うことはせず、生徒の直感により判断したものであることから、分割して集計した。A組は第1学年の1学級、X～Yは第2学年の2学級を表す。なお、A組とX組は普通科、Y組は国際科である。

【表9】【英語力の目標】第一回レベル別自己診断結果

		N=115 (単位:人)																			
		レベル3 (4級)					レベル4 (3級)					レベル5 (準2級)					レベル6 (2級)				
平均		A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%
		4.0		23	26	27	76	66.1	3	13	13	29	25.2	1	2	3	6	5.2	1	3	4
		21	29	36	86	74.8	5	8	6	19	16.5	1	1	3	5	4.3	1	3	4	8	6.9
3.5		10	11	9	30	26.1	11	13	18	42	36.5	2	7	10	19	16.5	1	1	2	4	3.5
		10	5	1	16	13.9	8	11	15	34	29.6	1	3	3	7	6.1	2	2	2	6	5.2
3.0		5	2	1	8	7.0	11	7	3	21	18.3	7	13	10	30	26.1	3	6	9	18	15.7
		8	4	1	13	11.4	13	11	9	33	28.7	6	9	15	30	26.1	1	1	2	4	3.5
2.5		1			1	0.9	10	6	3	19	16.5	10	11	10	31	27.0	4	14	9	27	23.5
		1	1		2	1.8	5	6	6	17	14.8	4	9	5	18	15.7	2	7	3	12	10.4
2.0							4			4	3.5	10	5	4	19	16.5	9	8	10	27	23.5
							7	2	1	10	8.7	14	10	4	28	24.3	4	7	12	23	20.0
1.5												9	2	1	12	10.4	10	9	6	25	21.7
							1	1		2	1.7	7	5	5	17	14.8	8	8	7	23	20.0
1.0												1			1	0.9	12	1	1	14	12.2
												7	2	2	11	9.6	25	16	12	53	46.1
平均値		3.71	3.81	3.85			2.99	3.42	3.55			2.24	2.77	2.91			1.73	2.23	2.34		
		3.67	3.79	3.99			2.95	3.18	3.26			1.97	2.40	2.64			1.28	1.60	1.73		

【表10】は第二回の実験群（評価活動実施群）【表11】は統制群（評価活動未実施群）の自己診断結果の集計である。C組は1学年普通科クラスである。

【表10】「英語力の目標」第二回レベル別自己診断結果（実験群）

		N=119 (単位：人)																								
平均		レベル3 (4級)					レベル4 (3級)					レベル5 (準2級)					レベル6 (2級)									
		A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%	A	X	Y	計	%					
4.0		17	27	35	79	66.4	2	9	16	27	22.7	1	1	2	4	3.4	1	1	1	3	2.5					
		12	23	29	64	53.8	1	6	10	17	14.3			1	1	0.8										
3.5		12	9	4	25	21.0	9	15	15	39	32.8	3	6	11	20	16.8		1		1	0.8					
		14	7	8	29	24.4	5	10	10	25	21.0		3	3	6	5.0			1	1	0.8					
3.0		9	3		12	10.1	17	4	5	26	21.8	9	12	14	35	29.4	1	2	3	6	5.0					
		10	9	1	20	16.8	13	10	15	38	31.9		8	11	19	16.0	1	1	1	3	2.5					
2.5		1	1		2	1.7	7	7	6	20	16.8	11	10	9	30	25.2	4	5	10	19	16.0					
		2	1	1	4	3.4	11	9	2	22	18.5	8	8	8	24	20.2		4	8	12	10.1					
2.0		1			1	0.8	5	6	1	12	10.1	8	5	2	15	12.6	12	12	11	35	29.4					
		2			2	1.7	7	5	2	14	11.8	9	10	11	30	25.2	4	10	16	30	25.2					
1.5												9	5	2	16	13.4	14	10	11	35	29.4					
							3			3	2.5	10	8	3	21	17.6	10	12	5	27	22.7					
1.0													1		1	0.8	9	10	4	23	19.3					
												13	3	2	18	15.1	26	13	8	47	39.5					
平均値		3.54	3.78	3.95			2.95	3.19	3.55			2.36	2.61	2.92			1.68	1.78	1.96							
		3.40	3.65	3.83			2.66	3.04	3.31			1.65	2.24	2.46			1.23	1.60	1.90							

【表11】「英語力の目標」第二回レベル別自己診断（統制群）

		N=38 (単位：人)			
平均		レベル3	レベル4	レベル5	レベル6
		C	C	C	C
4.0		13	3		
		12	1		
3.5		12	4	1	
		8	2	1	
3.0		6	12	3	
		8	12		
2.5		5	9	10	4
		5	11	5	
2.0		2	5	11	3
		5	4	6	2
1.5			5	7	6
			6	7	6
1.0				6	25
			2	19	30
平均値		3.38	2.68	2.00	1.32
		3.22	2.46	1.51	1.13

各学級の平均値を、「聞くこと・読むこと」で比較すると、第一回では、A組を100とした場合、X組・Y組の順に、レベル3では102.7、103.8、レベル4では114.4、118.7、レベル5では、123.7、129.9、レベル6では128.9、135.3となる。

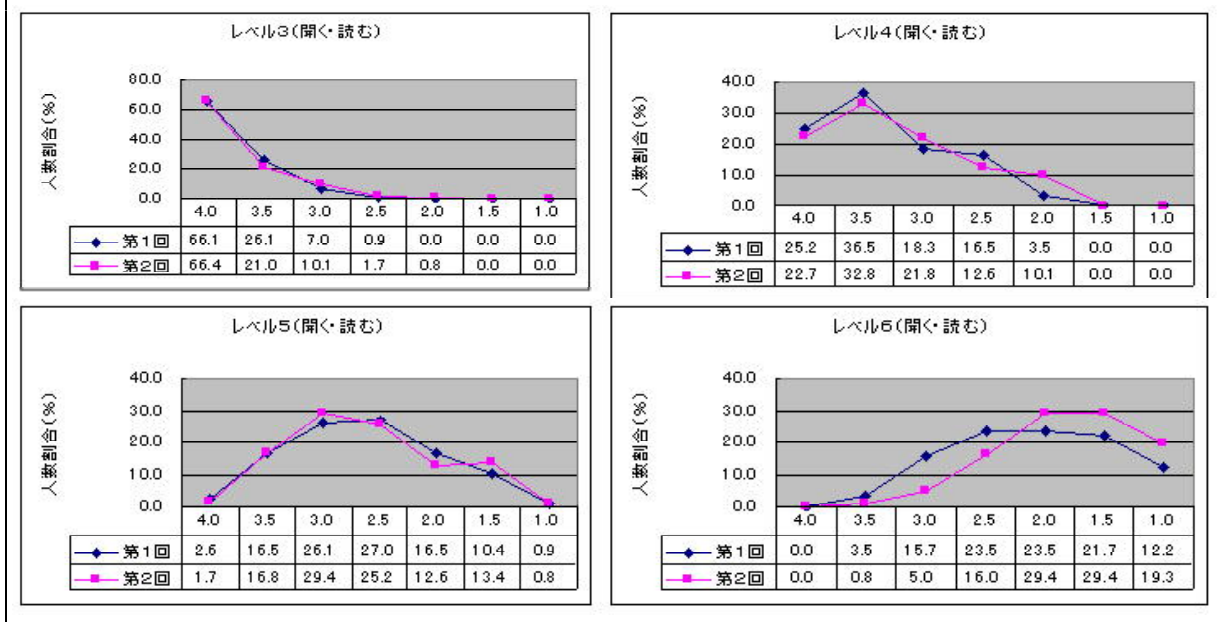
同様に、第二回では、レベル3では106.8、111.6、レベル4では108.1、120.3、レベル5では110.6、123.7、レベル6では106.0、116.7となる。

レベル5とレベル6において学年間の差が小さくなったのは、第二回の難易度が高くなったことが原因と考えられる。

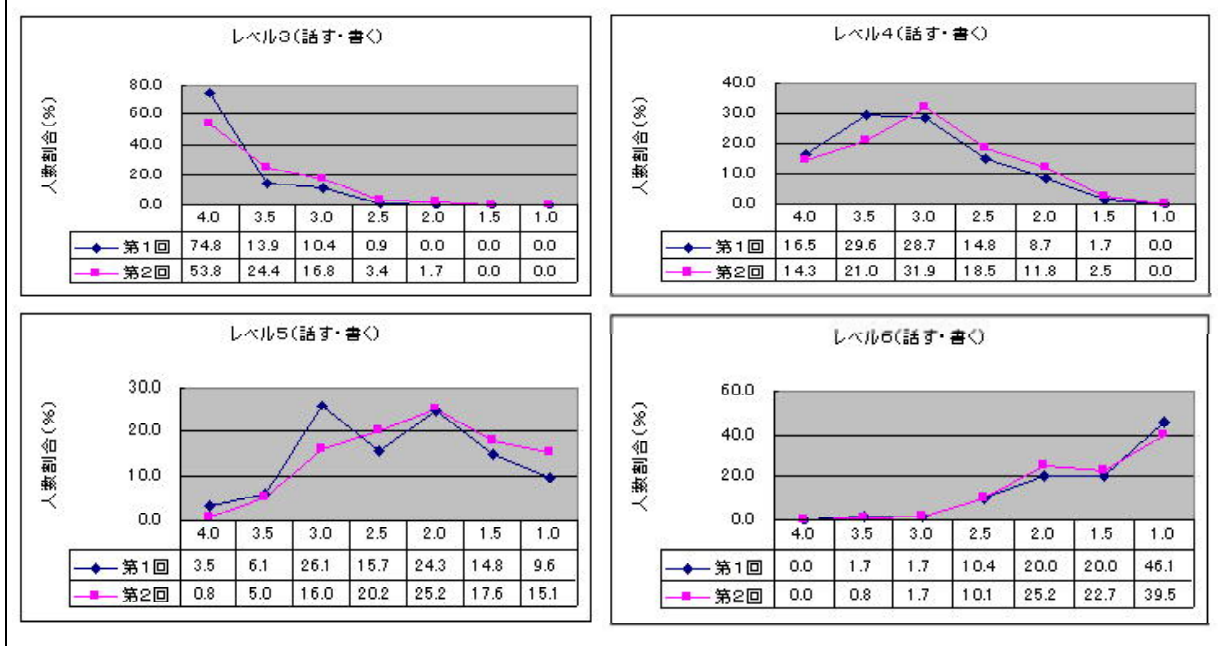
次に、均質の学級編成である1学年の実験群と統制群を第二回の結果で比較すると、C組を100として、A組は、レベル3では109.8、レベル4では111.6、レベル5では112.0、レベル6では131.1となり、レベルが高くなるにつれてその差が大きくなることわかる。

次頁の【図4】は、実験群全体での、第一回と第二回におけるレベル別自己診断結果のグラフである。14頁の【図5】は、第二回での、1学年普通科の実験群と統制群のレベル別自己診断結果のグラフである。各回・各群の実施人数が異なるため、人数割合で比較する。

「聞く・読む」



「話す・書く」

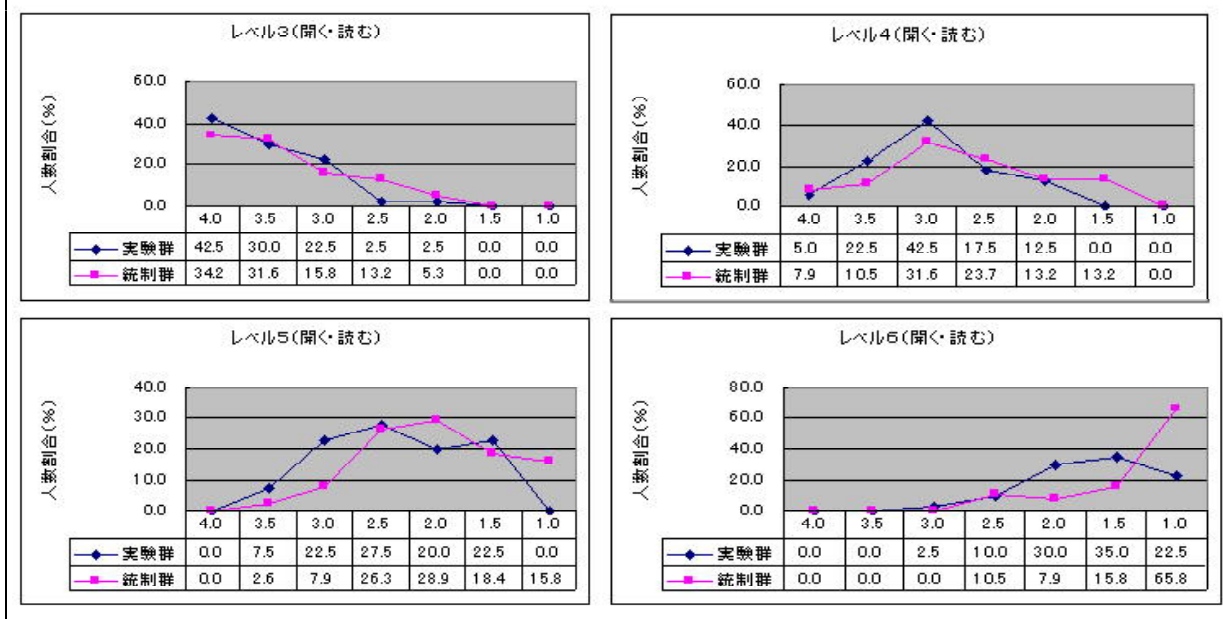


【図4】実験群における第一回と第二回のレベル別比較

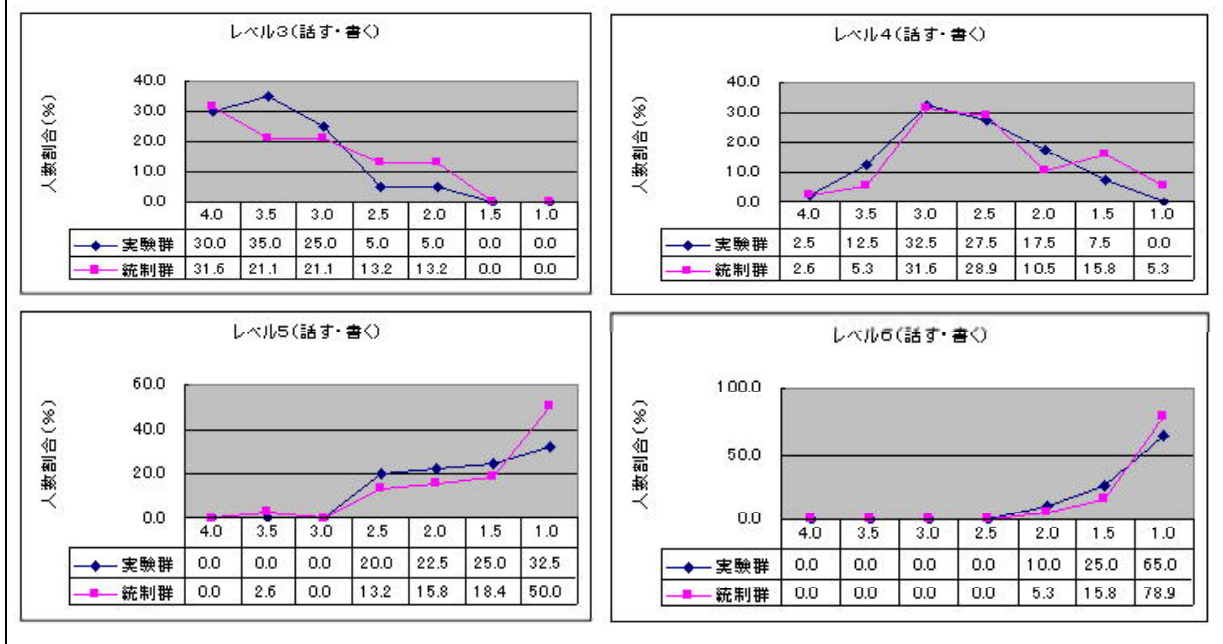
図から、第二回の問題が、「聞く・読む」についてはレベル6で、「話す・書く」についてはレベル4とレベル5でわずかに難易度が高くなったと判断できる。しかし、それ以外のレベルでは、「聞く・読む」「話す・書く」いずれにおいてもほぼ同じ結果となっており、「目標」の各レベルの問題の難易度設定が妥当であったと言える。

N=40 (実験群) N=38 (統制群) (単位: %)

「聞く・読む」



「話す・書く」

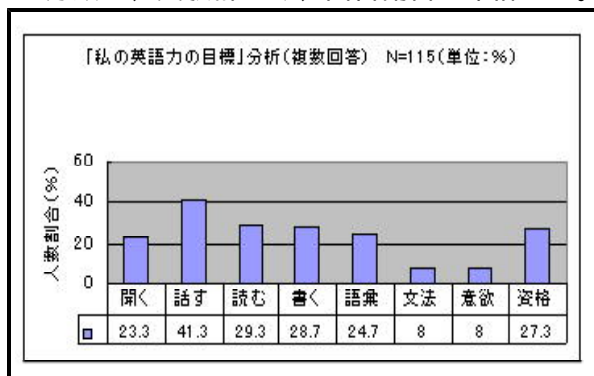


【図5】第二回における実験群と統制群のレベル別比較

実験群の方が統制群より全体的に左にシフトしており、実験群の方が英語力が伸びていることがわかる。英語力を判定した上で目標を持ち、授業での評価活動をとおして、意欲をもって学習を継続した効果であると考え。ただし、「目標」の実施経験の有無及び自己診断であることを考慮すると、客観性・信頼性に課題は残るが、レベルが高いほど両者の差が大きいことから、実験群は推測しながら聞いたり読んだりしており、話したり書いたりする問題でも自信をもって診断したものであると考える。

(2) 「私の英語力の目標」への記述による分析

生徒が記述した「私の英語力の目標」を、内容によって分類したものが【図6】である。各自の目標を、技能、意欲、資格の三点にまとめた。技能面については、四技能と語彙・文法に分類し、実験群のみ、回答割合で集計した。(記述内容の具体例は【補充資料6】参照)



四技能に関しては予想された範囲内であったが、「語彙」「文法」に言及した割合が予想を超えており、「目標」における「読むこと」の難易度がかなり高かったことによる意識の表れではないかと考えられる。また、「資格」を目標にあげる割合が高く、英語検定との関連等が意識付けになったものと考えられる。

記述を具体的に分析すると、2年生の方が根拠【図6】「私の英語力の目標」の記述内容分析を示した目標の立て方(「～だから、…ができるようになりたい」という記述が目立ち、自分の英語力をより客観的に分析した上で、目標を掲げていることがうかがえる。

授業における明確な指導目標とともに、生徒が掲げている目標を十分意識した指導過程・授業展開の工夫により、生徒の意欲や目的意識を持続させ、主体的に授業に参加させることが可能になる。

(3) 手だてに関する授業担当者の意識

本研究における手だてが有効であるかどうかを確かめるために、10頁の検証計画に従って、研究協力校で二人の教科担当者に意識調査の協力を得た。三か月にわたる、評価を位置付けた授業実践が終了した時点で調査紙に記入していただいた。【表12】と次頁の【表13】は、その記述をまとめたものである。カッコ内の数字は回答数を示す。(調査紙の詳細は【補充資料7】を参照)

【表12】手だてに関する教科担当者の意識(その1)

「英語力の目標」に関する意識	
設 問	回 答 内 容
1 実施の意義(意義を感じるか)	どちらとも言えない(2)
2 設定レベル(レベルと問題の難易度の関係)	「話すこと」「書くこと」: 適当である(2) 「聞くこと」「読むこと」: 難しい(2)
3 実施時期(第一回8月末の実施)	遅い(新学年の第一回の定期考査が終わり、方向性を見定める6月頃が適当)(2)
4 実施方法(授業中・教科担当者・自己申告制)	改善が必要(研究担当者による直接実施・授業時間外での実施・複数校での実施)(2)
5 英語力育成(効果があったか)	どちらとも言えない(1) そうは思わない(1)

英語力の育成については、「目標」の各レベル設定をさらに吟味し、最も効果的な時期を見極め、複数の学校で実施することにより、より多くの検証を重ねることが必要である。それにより実施の意義が深まっていくものと考えられる。

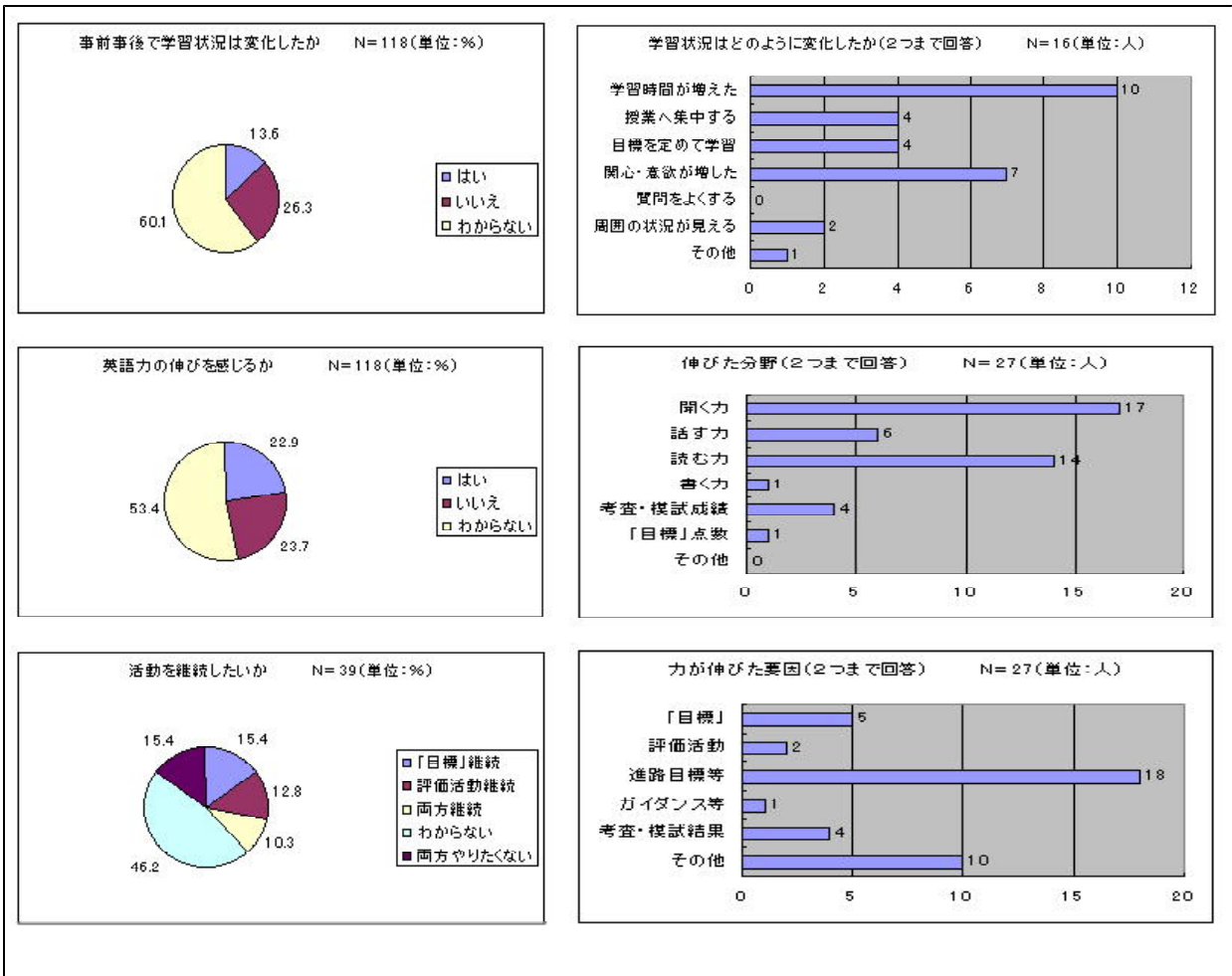
【表13】手だてに関する教科担当者の意識（その2）

評価活動についての意識	
設 問	回 答 内 容
1 実施の意義	どちらとも言えない（2）
2 様式・項目	内容（四技能・観点別）・評価者（三者）：この内容でよい（2） 評価の段階：適当（1）4～5段階がよい（1） 評価の回数（実施期間に比して）：適当（1）少ない（1）
3 仕事への負担	大変な負担であり継続は困難（2）
4 英語力育成	どちらとも言えない（1）そうは思わない（1）

「評価」については、年度の途中から、通常の評価活動に追加しての実施だったこともあり、負担感は免れなかった。また、実施期間が短かったため、英語力の伸びが目に見える形で現れるまでには至らなかった。単元や活動内容ごとに最適な評価を行うための様式を作成し、年度当初から、年間計画の中に評価活動を位置付けた長期にわたる実践を行うことで、英語力の育成状況が確かめられると考える。

(4) 手だてに関する生徒の意識

本研究における手だてに関して、10頁の調査計画に従って、生徒の意識調査を行った。【図7】はその結果をまとめたものである。（調査紙の詳細は【補充資料8】を参照）



【図7】手だてに関する生徒の意識

学習状況の変化・英語力の伸びの項目では、「わからない」が圧倒的に多かったが、学習状況の変化の有無に「はい」と回答した生徒については、明らかに実感できる学習状況の変化を伴うものと考えられ、そのうちの約7割が、英語力の伸びの有無にも「はい」と回答している。関心・意欲の増進と目標の設定、それに伴う学習時間の増加の要因の一部として「英語力の目標」が位置付けられたものとする。英語力の伸びに関しては、「聞く」「読む」の受容的スキルへの回答が多いが、この二つは自分で判断して力の伸びを実感できるスキルであり、その要因の一部として「目標」と評価活動をあげた生徒がいることは成果であるとする。「その他」をあげた生徒はすべて2年生であり、内容は「海外研修（修学旅行）」であった。

活動継続の意欲については、「わからない」が約半数に達したが、短期間での実践であり、力の伸びを実感できるまでには至らなかったことがその原因と考えられる。ただし、約4割の生徒が何らかの形で今回の活動の継続を希望していることは注目に値する。「どちらもやりたくない」と回答したものとあわせてそれぞれの理由を【表14】にまとめた。

【表14】活動を継続したい(したくない)理由

内 容	理 由
「英語力の目標」を継続してやりたい	目標を見つけて頑張ることができるから / もっと力を伸ばしたいから / 目標があった方がやる気が出るから / 常に目標を立てたいから / 自分の力をわかっていたいから
評価活動を継続してやりたい	理解力の伸びを知りたいから / 評価する・されるで自分の力が確認できるから / 力が伸びるかもしれないから / 今の自分の力がわかるから
「目標」と評価活動の両方を継続してやりたい	必要なことだと思うから / なんとなく / 両立したいから / 一応自分の力がわかるから
どちらもやりたくない	自分の目標でがんばれるから / やってもやらなくても変わらないから / 何のためにやっているかわからないし面倒だから / やっても意味がないから / 自分のためになっていないような気がするから

生徒があげた理由から、継続を希望するのは、目標をもち、自分の力と力の伸びを確認しながら学習に取り組んでいきたいからということがわかる。活動の継続を希望しないのは、自分の英語力の伸びの実感までは至らないことから、やっている意義・意味がわからなくなってきたからということであると考えられる。

以上から、今後の活動に際しては、その目的をより明確に伝え、活動の意義を共有しながら目標設定の支援や力の伸びの定期的な確認を行い、常により高いステップを目指してその実現や達成に向かっていくことが必要である。

4 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ

これまで、指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づき、高等学校において育成すべき英語力の目標を明らかにし、外国語科の指導と評価の計画に従って授業実践を行い、実践結果の分析・考察をとおして手だての有効性を検証してきた。そこで、今年度明らかになったことについて、成果と課題をまとめる。

(1) 成果

ア 高等学校で育成すべき英語力を具体的に示し、生徒の英語力を判定することによって、英語力の目標の設定ができたこと

イ 観点別に生徒の自己評価・相互評価を取り入れたことにより、学習の目標をもち、学習意欲の喚起を図ることができたこと

ウ 形成的評価と評価結果のフィードバック活動により、目標をより明確にした学習指導の方向性が見えてきたこと

エ 英語力の目標の設定と評価結果のフィードバックによって、生徒の英語力の育成を図る可能性が見えてきたこと

(2) 課題

ア 「英語力の目標」の各レベルのタスクについて、より多くの検証によって、客観性をさらに高めること

イ 英語力の判定にあたって、自己診断を含め、客観性と信頼性をさらに高める方法を工夫すること

ウ 生徒の意欲をさらに高め、指導改善と一体化した、より効率的な評価方法の在り方をさらに検討・工夫すること

以上のことから、課題は残るものの、外国語科において、英語力を判定し目標をもたせた上で、形成的評価を推進しながら評価結果を継続的にフィードバックすることで、生徒の英語力を育成することができるという見通しを持つことができた。

外国語科の研究のまとめ

1 研究の成果

この研究は、高等学校において育成すべき英語力を明らかにし、形成的評価と評価結果の継続的フィードバックにより、生徒の英語力の育成に役立てようとするものである。そのために2年次に当たる今年度は、英語力の目標を具体化し、指導と評価を位置付けた授業実践を行い、分析・考察をとおして仮説の妥当性について見通しを持つことができた。なお、成果について得られたのは次のことである。

(1) 高等学校において育成すべき英語力の目標の具体化

英国ナショナルカリキュラムをモデルに、英語検定や各種入学試験との関連を示し、生徒が目標を持って学習に取り組むことができるよう、高等学校において育成すべき英語力をレベル別に具体化すること。

(2) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画の作成

第1年次に作成した試案に基づき、生徒の英語力育成のために評価結果を継続的にフィードバックするための、自己評価・相互評価を取り入れた指導と評価の計画を作成すること。

(3) 指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価を位置付けた授業実践と実践結果の分析と考察

指導と評価の計画に基づいた授業実践により、意図的な評価と評価結果の継続的なフィードバックを位置付けた指導と評価の計画が、生徒の学習意欲を喚起し、英語力を育成する上で効果があるという見通しをもつこと。

(4) 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関するまとめ

外国語科の授業実践の成果と課題のまとめ、指導に生かす評価方法の工夫を図った試案に基づく指導と評価の計画の妥当性について見通しを持つこと。

2 今後の課題

本研究では、高等学校において育成すべき英語力を具体化し、生徒の英語力を育成する指導と評価の在り方について明らかにしてきた。

今後は、より多くの実践と検証をとおして、より客観性・信頼性の高い英語力の目標を提示するとともに、目標に準拠した評価をさらに推進し、指導改善に生かすための評価方法を工夫し、実用化と普及を目指す。

<おわりに>

この研究を進めるにあたり、ご協力いただきました研究協力校の先生方、生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。また、研究協力員としてご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 東 洋(2001), 『子どもの能力と教育評価』, 東京大学出版会
金谷 憲(2003), 『英語教育評価論』, 河源社
静 哲人(2002), 『英語テスト作成の達人マニュアル』, 大修館書店
田中正道(1998), 『日本の英語学力評価 - 回顧と展望 - 』, 教育出版
松沢伸二(2002), 『英語教師のための新しい評価法』, 大修館書店
松畑熙一・和田勝明(1995), 『中学校・高等学校におけるコミュニケーション能力の育成と評価』, 開隆堂
望月正道・相澤一美・投野由紀夫(2003), 『英語語彙の指導マニュアル』, 大修館書店
渡邊時夫監修(2003), 『英語が使える日本人の育成』, 三省堂

【参考Webページ】

- 英国ナショナルカリキュラム <http://www.nc.uk.net/index.html>
ビクトリア大学 HP (ポール・ネイション語彙分析ソフト)
<http://www.vuw.ac.nz/lals/staff/paul-nation/nation.aspx>

【補充資料】

【補充資料 1】英国ナショナルカリキュラム	資 1
【補充資料 2 - 1】「英語力の目標」表紙	資 3
【補充資料 2 - 2】「英語力の目標」第一回	資 4
【補充資料 2 - 3】「英語力の目標」第二回	資 12
【補充資料 2 - 4】「英語力の目標」第三回	資 20
【補充資料 3】高等学校英語 の指導と評価の計画（評価規準）	資 28
【補充資料 4 - 1】英語活動評価表	資 29
【補充資料 4 - 2】英語活動評価記録表	資 30
【補充資料 5】英語力診断表	資 31
【補充資料 6】「私の英語力の目標」記述例	資 32
【補充資料 7】調査紙（教師用）	資 33
【補充資料 8】調査紙（生徒用）	資 35

【補充資料1】英国ナショナルカリキュラム

	聞 く こ と	話 す こ と
レベル1	教室での指示、短い文、質問などを理解することができる。雑音などがなく録音状態のよいテープや、目の前でのはっきりとした話が理解できる。言葉の繰り返しや、身振り、手振りなどでの補助を必要とする。	見たり聞いたりしたことに単語、単文で応答することができる。発音は、必ずしも正確ではなく、発話のモデルや視覚的な合図を必要とする。
レベル2	種々の聞き慣れた文や質問を理解することができる（例：教室で日常的に使う言葉、タスクを開始する際に使う指示など）。はっきりした標準語に反応することができるが、繰り返しは必要とする。	見たり聞いたりしたことに応答することができる。人物、場所、物などの名前を言ったり、それらの描写をすることができる。決まり文句を使用することができる（例：助けや許可を求める）。発音は必ずしも正確ではなく、ためらいも見られるが、意味は明確である。
レベル3	雑音のない状態で、自然な早さに近い聞き慣れた短い指示、伝言、会話といった文体の話が理解できる。要点や個人的な応答を聞き分けることができる（例：好みや感情など）。部分的に繰り返しを必要とする。	身振りや手振りを使って、前もって用意した短いタスクに参加できる。短い文章を使って、個人的な応答ができる（例：好みや感情など）。基本的に、暗記した文章に頼るが、時々、語彙を入れ替えて多様な質問や答えを作ることができる。
レベル4	多少の雑音があっても、ほとんど自然な早さの聞き慣れた言葉の話を理解することができる。要点や詳細を聞き分けることができる。部分的に繰り返しを必要とする。	身振りや手振りを使って、最低でも3, 4回やりとりのある簡単な会話を交わすことができる。文法知識を活用して、単語や語句の置き換えができる。発音は、だいたいにおいて正確で、イントネーションはしっかりしている。
レベル5	現在、過去、未来の出来事を含め、よく知っている話題についての話を理解することができる。干渉のない、自然に近い早さで話される日常的な話に対処できる。要点や詳細を、意見なども含めて聞き分けることができる。部分的に繰り返しを必要とする。	短い会話に参加して、情報を求めたり、伝達したり、自分の意見を述べたりすることができる。会話は、最近の体験談や将来のこと、日常生活や趣味、興味などに及ぶ。多少間違いは見られるが、容易に意図を伝えることができる。
レベル6	現在、過去、未来の出来事や、短い談話や話し言葉の引用などを理解することができる。多少雑音や発話者のためらいなどが混じっても、自然な早さでの話に対処できる。要点や詳細を、意見なども含めて聞き分けることができる。繰り返しは、ほとんど必要としない。	現在、過去、未来の出来事についての会話に参加することができる。文法知識を新しい場面などに応用することができる。日常的な情報収集や説明などは、学習言語のみで行うことができる。多少ためらいが見られても、容易に意図を伝えることができる。
レベル7	文法的に複雑な文や、聞き慣れない語彙の入った話を理解することができる。自然な早さでのニュース速報や、ラジオやテレビ番組を理解することができる。繰り返しは、ほとんど必要としない。	会話を始め、進めることができ、個人的な興味や時事の話題について話し合うことができる。その場で言葉を使い分けたり、分かりやすく言い換えたりすることができる。発音、イントネーションともによくでき、使用する言葉はおおよそ正確である。
レベル8	様々なタイプの話し言葉を理解することができる（例：ニュース、インタビュー、ドキュメンタリー、映画、劇など）。よく知らない話題のものでも推測ができ、話し手の態度、感情を聞き取ることができる。繰り返しは、ほとんど必要としない。	自分の意見を出してそれを正当化したり、事実、考え、経験などを話し合うことができる。幅広い語彙、構文、時制が使える。不意の状況での会話にも対処できる。正しい発音とイントネーションで自信を持って話ができ、使用する言葉は正確である。
レベル9	異なる観点、議題、問題などを含め、幅広く事実に、創作的な話を理解することができる。聞いたことを詳細にまとめ、報告、説明することができる。個人的な興味に応じて、録音された教材を選び、それに応答することで独立した聴解技能を向上させることができる。	幅広く事実に、創作的な話題を扱い、個人的な観点や意見を正式な場、あるいはうち解けた場で話すことができる。予期せぬ発言や見知らぬ人との会話にも、自信を持って対処できる。正確な発音で流暢に話し、イントネーションも変えることができる。明確に用件が伝えられ、間違いはほぼ見られない。

* 「レベル9」はNCでは「例外的到達レベル」と分類している。

	読むこと	書くこと
レベル1	よく知っている文脈において、はっきり書かれた言葉を理解することができる。視覚的な補助を必要とする。	よく知っている言葉を正しく書き写すことができる。語彙を分類し、適切な言葉を選んで、文節や文を完成させることができる。
レベル2	よく知っている文脈において、はっきり書かれた短い文節を理解することができる。よく知っている語句を音読することで、音と文字を結びつけることができる。本や語彙解説書などを用いて、新しい単語の意味を調べることができる。	よく知っている句を正しく書き写すことができる。教室でよく使われる言葉（例：簡単な指示など）や決まり文句などを書いたり、ワープロで打つことができる。記憶を頼りによく知っている言葉を書くことができるが、綴りを間違えることがある。
レベル3	よく知っている言葉で書かれ、活字化された短い文章や会話を理解することができる。要点や個人的な応答を読み分けることができる（例：好みや感情など）。簡単な文節を選んだり、外国語辞書や語彙解説書で新しい言葉の意味を調べたりして、自立して読むことができる。	補助（例：教科書、壁に貼ったチャート、自動が書いたものなど）を使って、よく知っている話題について2～3つの文で個人的なことについての文章を書くことができる（例：好みや感情など）。記憶に頼って短い文が書ける。
レベル4	印刷、もしくはきれいに手書きされた短い物語や実話を理解することができる。要点や詳細を読み分けることができる。独力で読むときに、外国語辞書や語彙解説書を利用すると同時に、文脈から未知の語彙の意味を推測することができる。	記憶を頼りに3～4つの文でできた文章を書くことができる。文法知識を活用して単語や語句の置き換えができる。外国語辞書や語彙解説書で既習事項を復習することができる。
レベル5	よく知っている文脈における現在、過去、未来の出来事についてなど、種々の読み物を理解することができる。要点や詳細を、意見なども含めて読み取ることができる。学習言語が使用されている国の生教材も読むことができる（例：パンフレット、新聞記事、手紙、データベースなど）。自信を持って音読でき、辞書なども使うことができる。	短い文章で情報や意見を求めたり、伝達することができる。内容は、最近の体験談や将来のこと、日常生活や趣味、興味などに及ぶ。多少間違えるが、容易に意図を伝えることができる。辞書や語彙解説書を使い、語彙を調べたり確認したりできる。
レベル6	現在、過去、未来の出来事についてなど、種々の文書を理解することができる。要点や詳細を、観点なども含めて読み取ることができる。興味のある話や記事など、自分の能力の応じて本などの読み物を選ぶことができる。意味がわからない語彙があっても、文脈や文法知識から推測することができる。	簡単な文章で、現在、過去、未来の出来事について書くことができる。文法知識を新しい文脈などに応用することができる。多少間違えがあっても、意図はほぼ明確に伝えられる。
レベル7	文法的に複雑な文章や、未習語彙の入った種々の事実的、創作的な文章を理解することができる。読み物を通して得た新しい語彙や文法を活用することができる。辞書などを有効に使うことができる。	適切な表現を使って事実的、創作的な話題について、様々な長さの文章を書くことができる。また、文や段落をつなげ、観念を構成し、目的に応じて既習の文体を活用することができる。文章を編集したり、書き直したりすることができる。参考図書を利用して表現の的確さや正確さ、多様性を向上させることができる。まれに間違いが見られても、意図が明確に伝えられる。
レベル8	幅広い読み物を読むことができる。個人的な興味や情報収集のために読む時は、必要に応じて辞書、辞典、参考図書などを利用することができる。より複雑な語句の入った新しい話題の文章も容易に読み、態度や感情を読み取ることができる。	考え、意見、観点を表現して、それらを正当化し、人の見解を求めることができる。読んだもの、見聞きした物の内容を発展させることができる。綴りと文法はほぼ正確で、文体を文脈に合わせて適切に使うことができる。参考図書を利用して、語彙の数や正確さを向上させることができる。
レベル9	公式、正式の文書を含め、幅広く、異なった観点や議題、問題などについての事実的、創作的な文章を理解することができる。読んだものを詳細にまとめ、報告、説明ができる。個人的な興味に応じて、小説、記事、本、劇などを選んで、読解技能を向上させることができる。	幅広く事実的、創作的な話題について、理路整然と正確に書くことができる。目的に応じて、文体を適切に使い分けることができる。種々の文章スタイルを身に付けるために辞書、辞典などを活用することができる。

英 語 力 の 目 標

1. これは、現時点での「英語力」を4つの分野（「聞く」「話す」「読む」「書く」）ごとに、9つのレベルで診断するものです。
2. 現在の英語力を用いて何ができるのかを明らかにし、それをもとに自分の目標を持ち、次のレベルへと英語力を高めるための1つの材料です。

各レベルと英語力の目安

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	英検・語彙数	入試問題
レ 1	習った単語を正しく聞き分ける	見たものを習った単語レベルで描写する	習った単語を読んで理解する	習った単語を正確に書き写す	200語	高 校 入 試 セ ン タ ー ・ 二 次 標 準 国 公 二 次 標 準 関
レ 2	習った短い文を聞き分けて理解する	見たものを簡単に述べ、決まり文句が使える	習った単語を音読でき、短い文を理解する	短い文を正確に書き写す	5級 600語	
レ 3	簡単なあいさつや自己紹介などを聞き取る	簡単な自己紹介や日常のあいさつをする	短い文章の要点を読み取り、辞書などを用いる	正しい文字の使い方がわかり、簡単な手紙を書く	4級 1300語	
レ 4	道案内や日常に関する伝言を聞き取る	他人の紹介をし、簡単な道案内をする	簡単な手紙や掲示板、説明書を読み取る	簡単な日記を書き、日常の描写をする	3級 2100語	
レ 5	日常的なことについての電話の内容を聞き取る	自分のことを電話で伝え、簡単な報告をする	簡単な新聞記事やパンフレットを読んで理解する	日常の体験や予定などを簡単に説明する	準2級 3600語	
レ 6	やや抽象的な説明や事務的な電話内容を聞き取る	一般の事柄について説明し、簡単な通訳をする	簡単な小説や興味ある分野の記事を読み取る	趣味などの事柄を説明的にやや長い文章で書く	2級 5100語	
レ 7	テレビ・ラジオなど放送・報道の概要を理解する	社会的出来事の概要を説明し、幅広く通訳をする	幅広く読書し、新聞や辞典の情報を的確に捉える	会議の記録をとり、自分の見解の概要を書き表す	準1級 7500語	
レ 8	各種放送や演説・討議などを十分理解する	通訳や電話での折衝をし、報道内容を的確に伝える	新聞、雑誌、一般文献など十分に理解する	自分の意思、見解や演説原稿を十分に書き表す	1級 1万-1.5万	
レ 9	あらゆる英語を十分に聞いて理解する	あらゆる場面で正確かつ適切に話す	専門書を含め英語を読むことに不自由しない	適切な文体や専門用語を駆使して書く	1.5万～	

* 中学校高学年段階ではレベル3～4を、高校1～2年ではレベル4～5を、高校3年生段階では5～6を目標に努力してみましょう。

P A R T 1 「聞くこと」

LEVEL 1

次の単語を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

table / breakfast / walk / swim / sunny / beautiful

LEVEL 2

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

You have a nice bike, Judy. -- Thanks, but it's my sister's.

LEVEL 3

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

This summer, Kevin and his brother Fred are going to stay at their uncle's house in the country. They will stay there for three weeks.

LEVEL 4

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Tomoko gave a speech to her English class about her trip to Australia. The students really liked it because she showed many pictures from her trip. They were pictures of the beaches, the animals, and the cities.

LEVEL 5

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Pauline wanted to go skiing with her friends during the winter vacation. However, she didn't have very much money, so she decided to look for a part-time job. She finally found one as a waitress at a French restaurant near the house. She worked there for two months and saved enough money to go skiing.

LEVEL 6

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Yukiko's parents are having their 50th wedding anniversary party next week. Yukiko and her brothers plan to give them plane tickets to London as a present. Their parents are interested in European history and have always wanted to visit the British Museum in London. Yukiko and her brothers are excited because they know their parents will be very pleased.

LEVEL 7

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Out for a Drive

Americans love their automobiles. In the country that gave us Henry Ford and the affordable car, many simply cannot leave home without them -- not even to go a block or two to the local supermarket. In fact, fifty to seventy percent of America's downtown areas are allocated for automobile use, which only fuels the cycle of car dependency. Indeed, the average family's transportation costs rose an average of eight percent a year in the 1990s.

Europeans are car lovers, too, and spend proportionally more money on their automobiles than Americans do. But Europe is far ahead of the U.S. in the area of public transportation. In fact, some European cities are going "car-free" by removing parking meters and traffic signals and devoting less space to roads and parking lots. A radical move, yes. But the public response? Overwhelmingly positive.

LEVEL 8

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Genes Spark a Debate

The oceans have long been home to creatures that glow in the dark, including luminous shrimp, squid, and jellyfish. Now scientists have created a host of new glowing species. By inserting fluorescence genes from jellyfish into mice, rabbits, and monkeys, the scientists have created living things that give off a green glow. The initial research aimed to throw light on the development of disease, as the fluorescence gene can track the growth of cancer tumors. Now, however, scientists hope to use the technique to aid in cleaning polluted waters, discovering how food poisoning spreads, and maybe even in creating a Christmas tree that can light up on its own.

The business world has seen the light, and companies are rushing to develop methods to use the technology. This, however, has sparked a moral debate. Many fear that the headlong rush into biogenetics could produce unnatural side effects, like those seen in genetically engineered corn that contained a possible human allergen. One artist, who planned to show a glowing bunny at an art exhibit to usher in the age of transgenetic art, had to cancel the exhibit due to vehement protests over using altered life forms for artistic purposes.

PART 2 「話すこと」

LEVEL 1

次の単語を英語で言いなさい。
「誕生日」「切符」「走る」

LEVEL 2

次の対話を完成させなさい。

"How are you?" -- "_____."
"_____?" -- "I'm from Iwate, Japan."

LEVEL 3

次のことについて英語で自己紹介をしなさい。

「名前」「年齢」「好きな教科」「趣味」「家族構成」「通学方法」

*かっこ内から2つ以上

LEVEL 4

郵便局へ行く道をたずねられたとき、英語で次のような道案内をしなさい。

「通りをまっすぐ行って、最初の角を左に曲がれば右手に茶色の建物が見えるので、それが郵便局である」

LEVEL 5

次の内容を、ホームステイ先の家族に伝えなさい。

「今度の日曜日に、友人3人と一緒に電車で繁華街に行って映画を見て、その後で本屋に寄って欲しい本を買ってから、夕方には帰宅する」

LEVEL 6

次の内容を英語で友人に伝えなさい。

「列車の出発が、大雪のために1時間ほど遅れる見込みであり、約束の時間に遅れてしまうこと。予定通りに運転が再開されたら、それに乗って、駅からはタクシーでできるだけ早く会いに行くつもりであること」

LEVEL 7

次のうちの1つについて、クラスで3～5分間英語のスピーチを行いなさい。

「インターネットの利用価値について」
「家庭における家族の仕事分担について」

LEVEL 8

次のうちの1つについて具体例を交えて聴衆の前で10分程度の英語のスピーチを行いなさい。

「国際関係におけるスポーツの役割について」
「個性と自己中心の違いについて」
「生涯教育の意義と価値について」

PART 3 「読むこと」

LEVEL 1

次の単語を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

people / little / tomorrow / station

LEVEL 2

次の文を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

- Let's play badminton after school today.
- Mr. Brown is a doctor. He works in that hospital.

LEVEL 3

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間2分)。

Emily is 14 years old. Her best friend is Cindy. They both joined their school's music club last year. They enjoy singing and playing the guitar together every day.

Their school has a very good music teacher. His name is Mr. Brown. He is very popular because he is kind and funny. One day, he broke his leg and had to stay in the hospital for about a month. Everyone in the music club was sad. Then, Emily said, "Let's write a song for Mr. Brown, and sing it for him when he comes back." They all said, "That's a very good idea!"

So, after school, Emily and Cindy wrote a new song together. Everyone practiced very hard. When Mr. Brown came back to school, they sang the song for him. He was surprised and happy. He said, "This is a wonderful present. Thank you!"

LEVEL 4

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)。

I Can Do Anything

Curtis Pride was born in Washington, D.C. on December 17, 1968. When Curtis was seventeen months old, his doctor told his mother that Curtis could hear almost nothing. In 1971, his family moved to Silver Spring, Maryland. Curtis started a special school program there. For three years, he took classes to help his speaking. Then he started taking classes with students who could hear. Some students didn't like Curtis because he was different. Curtis's mother told him that he should not stop doing the things he wanted to do. He never forgot what she said.

In high school, Curtis was the only student that couldn't hear. He studies very hard and his teachers said he was a great student. He loved sports and played soccer, basketball, and baseball. For all those sports, he made new records for his high school.

At college, he studies business, and in the summers he played baseball with the New York Mets, a major league baseball team. Since he graduated in 1990, Curtis has played for four other major league teams. He is the first major league baseball player who can't hear since 1945.

Every year, Curtis Pride receives hundreds of letters from young men and women with disabilities. With the help of his family, he answers all the letters he gets. For the past few years he has also worked with disabled students. Curtis says that having a disability teaches him never to give up. He tells this to all the people he meets.

LEVEL 5

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)

Aid for Families

Catherine Bertini has a very important job. She is head of the United Nations World Food Program (WFP), the largest agency in the world providing food to hungry people. The WFP receives a large amount of money and food from governments and other groups, and Bertini must decide when and where to send these resources. The WFP sends food aid to nations throughout the world, including Ethiopia, India, Vietnam, and Mexico. The people it helps are mainly victims of wars and other disasters.

As the first female director of the agency, Bertini has started a whole new way of giving out food aid. She has decided to give most of the WFP aid directly to women. One reason is that most refugees are women and children. But Bertini also realized that it is women who do the most to keep families together. As a result, they are much more likely than men to share food aid with all family members.

Bertini is also trying to use WFP food aid for school lunches to improve the chances of girls receiving education in developing countries. Currently, many governments still pay more attention to education for boys than girls, and families often send only their sons to school. Bertini has decided to make sure that half of the food aid for school lunches goes to girls. She thinks that this new system will make it easier for families to educate their daughters.

During her nine years as a director of the WFP, Bertini's new ideas have been very successful. In 2000, the WFP helped more than 80 million people in 83 different countries. It is hoped that the efforts of the WFP will help many more families escape poverty.

LEVEL 6

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)

Long-Distance Surgery

On September 7, 2001, a team of doctors performed an operation on a patient in France. The operation itself was an ordinary one that is carried out every day in hospitals all over the world. But there was something special about this case -- the doctors were thousands of miles away in New York. In fact, it was the first successful use of a new technology that lets doctors perform surgery over long distances.

The technology involves a set of robot tools that have been designed to carry out the same tasks as a human doctor. The doctors in charge of the operation are able to control these tools and watch what is happening through a fiber-optic network. This high-speed network is able to send data and images from the operating room over long distances in less than one-fifth of a second. This is very important during surgery, since any delay could cause doctors to make serious errors in judgment, possibly putting the patient's life in danger. In addition, local doctors are present at the site of the operation so that they can take emergency action if a problem occurs.

There are several benefits to this type of surgery. For one thing, those who live in remote areas or in countries that lack experienced doctors can receive the services of the world's best doctors. Moreover, the robot tools can make small, very precise movements that would otherwise be impossible.

Although long-distance surgery looks promising, there are still many problems to overcome before it becomes widely available. One major issue is the question of responsibility. If something goes wrong, who is to blame -- the doctors performing the operation, the doctors at the operation site, or the makers of the robot tools? Another problem is cost. The technology necessary to carry out long-distance surgery is very expensive, and most hospitals cannot yet afford it. If these problems can be overcome, however, patients in the future may be able to enjoy a high level of medical treatment regardless of where they live.

LEVEL 7

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

Shoplifting -- Crime to Go

People often begin shoplifting as much for the thrill of it as for gain or out of malice, but that's not what makes it unique among crimes. Shoplifting stands out because it can be perpetrated with equal ease by 6-year-old boys and 80-year-old grandmothers. Shoplifting is also a crime that has proven very difficult to combat. It takes place 800,000 times a day in the U.S. alone -- with targets ranging from inexpensive batteries and candy bars to valuable jewelry -- and costs retailers \$13 billion a year. Interestingly, shoplifting is an unintentional indicator of the state of the economy. In times of recession, with more people out of work and stores hiring fewer salesclerk to watch over their stores, shoplifting increases.

Shoplifting is a crime that arose out of the nineteenth century's mass-merchandising culture. "Consumer culture manipulates the senses of the shoppers, seduces them, weakening their ability to resist temptation," says Lisa Tiersten, cultural historian at Bernard College. As mass merchandising became increasingly popular in the late 1800s, some housewives found it difficult to resist stealing goods from stores brimming with attractive products. The rigid Victorian morality didn't know how to categorize these otherwise respectable women, so doctors invented a new disease called "Kleptomania," impulsive behavior over which the shoplifter was believed to have little control.

Many experts argue now that the majority of habitual perpetrators suffer from addictive-compulsive disorder, a psychological term used to describe people who find so much gratification in pocketing stolen goods that they have difficulty stopping, despite the obvious risks. The remainder of shoplifters fall into a number of categories -- professional criminals, drug addicts who desperately need money to maintain their habit, and thrill seekers, who are often teenagers. Other experts, including many of those responsible for security, disagree with the theory that shoplifters are somehow victims. They see the cause of shoplifting as nothing more than greed, self-gratification, and the pursuit of cheap thrills. This group of experts feels that shoplifters should be prosecuted to the full extent of the law, believing that tougher measures are the only way to reduce the number of crimes.

Whatever the reasons behind shoplifting, shop owners spend small fortunes on technology to reduce product loss. Sensors tags are common sight throughout larger retail stores. Despite all these efforts, however, shop owners are also battling an enemy within: the majority of shoplifting isn't perpetrated by shop customers, but by store employees. Whether the motivation for this type of stealing is greed or vindictiveness against employees, such theft is much more difficult to catch.

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

A Trick of the Light

Astrologers claim that the motions and interactions of celestial bodies have a direct influence on human affairs, and that the configuration of the constellations at the time of a person's birth is important in predicting that person's future. But by what mechanism could the actions of stars separated from Earth by distances measured in light years possibly affect our day-to-day lives? From a scientific viewpoint, the only conceivable influence would be gravity, but any gravitational attraction on us from deep-space objects is far outweighed by the influence of smaller, closer bodies such as the moon. Besides, why would this attraction affect someone born in August one way and someone born in October another?

For all its worldwide appeal, the astrology industry hinges on principles that any backyard astronomer can easily debunk. Take, for example, the constellations Taurus and Leo. Hard to recognize as a bull and a lion at the best of times, they would disappear altogether if viewed from elsewhere in the universe because their component stars are not physical groupings. In fact, the apparent connect-the-dots arrangement of stars in any constellation is no more than an optical illusion -- in the same way that two mountains may appear connected when viewed from a distance but in fact be hundreds of miles apart. Taurus is the name for a strikingly beautiful and yet purely subjective pattern of unrelated stars and can no more govern the affairs of mankind than it can claim to be an actual bull.

There are exceptions to the physical-grouping rule. The Pleiades, a bluish-white star cluster that shimmers in the "shoulder" of Taurus on winter nights, are a family of stars held together by common gravity. But the Pleiades are a *cluster*, not a zodiac constellation, and are conspicuously absent from the daily horoscopes.

Another point should suffice to demonstrate just how flawed the intellectual basis of astrology is. Because of the finite speed of light and the unfathomably large tracts of space that separate us from stars other than our own sun, the lights we see in the night sky are merely footprints. Regulus, for example, the bright star that forms the "heart" of Leo, is 85 light years from Earth, which means that the Regulus-shaped pinpoint of light reaching our eyes was actually emitted nearly a century ago; the star itself has moved on, having not occupied that particular piece of celestial real estate since the First World War. Even if the positions of the stars really did determine events on Earth, astrologers' predictions would still be wrong for the simple reason that the stars are not where they appear to be.

Ironically, such cosmic sleight of hand is what keeps astrologers in business. Astrological forecasts create the illusion of truth by being open-ended enough to allow a wide variety of interpretations. When researcher and renowned skeptic James Randi posed as an astrologer by publishing random horoscope entries in a weekly column, readers were impressed at his uncanny accuracy -- until they learned that he, like the industry he sought to expose, was a fraud.

PART 4 「書くこと」

LEVEL 1

- 1 次の単語を正確に書き写しなさい。
picture / Thursday / watch
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
「ケン(Ken)は5歳です」

LEVEL 2

- 1 次の文を正確に書き写しなさい。
How much is this book? -- It's 500 yen.
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
・「ミキ(Miki)は日本に住んでいます」

LEVEL 3

- 次の内容を英語で書きなさい。
- ・「私は毎朝6時に起きます。毎日自転車で学校に行きます」
 - ・「読書は好きですか」「はい。毎月5冊本を読みます」

LEVEL 4

- 次のうちの1つについて、3～4文の英語で書きなさい(制限時間5分)。
- ・好きな季節とその理由
 - ・嫌いな教科とその理由

LEVEL 5

- 次の内容を、2～3段落の英語(50～80語)で書きなさい(制限時間10分)。
- ・英語を勉強している理由として、世界中の人々と話をし、やがては世界平和のために働きたいということを伝える

LEVEL 6

- 次の内容を、3段落以上の英語(150語程度)で書きなさい(制限時間15分)。
- ・一般の読者に対して、健康の大切さを実感した自分の日常の中での経験を伝え、健康維持のために日頃から心がけていることを伝える

LEVEL 7

- 次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい(制限時間30分)。
- ・中高生に対し、テレビの功罪について、相手を意識し納得させるような内容で、必要に応じて提言を加える

LEVEL 8

- 次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい(制限時間60分)。
- ・環境破壊に関する自分の知識を系統立てて述べ、その対策について個人から国際までのレベルでの小論文

P A R T 1 「聞くこと」

LEVEL 1

次の単語を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

window / station / August

LEVEL 2

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Can you play the piano, Tim? -- No, I can't. But I can play the guitar.

LEVEL 3

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Mary is looking for a book about pandas. Today she went to two bookstores and a library but she couldn't find one.

LEVEL 4

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Kenji usually wakes up after 8 o'clock on weekends, but tomorrow he will fly to Okinawa with his family. Their plane leaves at 8:30 in the morning, so he must get up before six..

LEVEL 5

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Basketball was first played in the United States. It was invented in 1891 by a P. E. teacher named James Naismith. He wanted to create an indoor sport that people could play to stay healthy in the winter. The first basketball players used a soccer ball and threw it into baskets. Today basketball is played all around the world.

LEVEL 6

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Now for the traffic report. Some bridges and roads in the center of Chicago will be closed from 10 until 3 tomorrow because of the St. Patrick's Day Parade. Any cars parked in the area will be removed by the police. The police are asking all drivers to avoid the area if possible. Those who plan to drive in the area should pay attention to the special street signs.

LEVEL 7

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

The World's Fastest Retirees

Greyhounds are famous as race dogs, not pets. So how does an Irish greyhound end up living with an Italian family after a career at a Barcelona racetrack? An organization called S.O.S Galgos may have been the link. S.O.S. Galgos is one of several nonprofit greyhound-rescue operations that find homes for retired racing dogs -- dogs that would otherwise be put to sleep. The adoption process requires a personal interview, a written pledge to provide basic care, and a donation to cover doctor's fees.

Greyhounds are ideal sprinters, but what qualifies them to be good pets? In essence, greyhounds are good with people. In fact, their people-friendliness generally disqualifies them as watchdogs. They're gentle enough for frail, elderly owners. Though able to run 70-plus kilometers per hour, their inclination to be lazy has earned them the nickname "the world's fastest couch potatoes." If you're too busy for a daily walk, a greyhound may actually be your ideal pet.

LEVEL 8

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

America's New Immigration Wave

The United States is in the midst of a huge immigration wave, with an inflow of nearly 1 million people a year. According to the 2000 census, about 10% of America's 281 million citizens were born outside the U.S. In fact, Americans with European ancestry will likely become a minority by the middle of the century, when the majority will trace their ancestry to Latin America, Africa, Asia, and the Middle East.

Some Americans worry about the effects of this immigration wave on the English language. After all, up to half of the children in most major U.S. cities speak a native language other than English.

The influx of foreigners has not always brought about smooth assimilation, but Americans do seem to be coming to grips with cultural diversity. Many Americans are even welcoming diversity into their own homes. According to census figures, the number of interracial couples jumped more than fourfold in the 24 years from 1970 to 1994, with a total of over 3 million such couples today. The result of all this intermingling may be that racial categories will have little meaning by the end of this century.

PART 2 「話すこと」

LEVEL 1

次の単語を英語で言いなさい。
「辞書」「泳ぐ」「美しい」

LEVEL 2

次の対話を完成させなさい。
" _____ ?" -- "I'm 165 cm tall."
"Nice to meet you." -- " _____ ."

LEVEL 3

自分の住んでいる地域について、次の内容のうち2つ以上を英語で伝えなさい。
「冬は雪が多い」「春にたくさん桜が咲く」「海が近い」「町中を大きな川が流れている」
「美しい山が見える」「住宅地でにぎやか」「古いお寺がある」「大きな工場がある」

LEVEL 4

A L T に、海外の姉妹校から来ることになった高校生について、次の内容を紹介しなさい。
「名前はサラ。出身はオーストラリアで、17歳。2月の第2週から、半月の予定で日本に滞在し、自分の家にホームステイをする。」

LEVEL 5

次の内容を、風邪で欠席している留学生の友人に電話で伝えなさい。
「明日の午前の授業変更はないが、6校時の英語が体育に変更になったので運動着を忘れずに持ってくるように。放課後には演劇部の集会を行う。」

LEVEL 6

買い物の最中に困っている外国人に、店員が言った次の内容の概要を通訳しなさい。
「当店ではアメリカドルを使うことはできないが、カードはほとんどの種類が使用可能である。値段は5%の税込みであり、値引きすることはできない。すべての商品は品質保証がされていて、安心して購入いただける。」

LEVEL 7

次のうちの1つについて、教室で3～5分間英語のスピーチを行いなさい。
「宇宙ステーションで暮らしてみたいですか？」
「10年後の日本はどうなっていると思いますか？」

LEVEL 8

次のうちの1つについて具体例を交えて聴衆の前で10分程度の英語のスピーチを行いなさい。
「動物を実験材料として用いることの可否」
「現代社会における文化的伝統の役割」
「大企業の社会的役割と責任」

PART 3 「読むこと」

LEVEL 1

次の単語を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

park / glass / computer / throw

LEVEL 2

次の文を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

- Bob gets up very early every morning. He goes to school by bike.
- Here's a birthday present for you. -- Thank you very much.

LEVEL 3

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間2分)。

Julie is 14 years old. She lives in Hawaii with her parents and her grandfather. Every morning they all have breakfast together.

One Saturday morning, her grandfather did not eat breakfast with them. Julie asked, "Where is Grandpa?" Her mother said, "He went to buy a ticket. He is going to Japan this summer." She said to her mother, "I want to go to Japan, too!"

Later that day, Julie's grandfather came home. He gave her a small book with a picture of Mt. Fuji on it. Julie looked at the picture and said, "I want to go and see Mt. Fuji." Her grandfather smiled and said, "You'll see it with me this summer!" Julie was very surprised. "Really, Grandpa?" she asked. Her grandfather said to her, "I bought two tickets this morning. I will take you to Japan with me." Julie will go with her grandfather and get her passport on Monday.

LEVEL 4

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)。

Lucky Lindy

Charles Lindbergh was born on a farm in 1902. When he was young, he was interested in machines. At 18, he went to college and studied engineering, but he wanted to fly airplanes instead of studying. So, he left college after two years, learned to fly, and then joined the army to fly planes. After that, he started working for a company that sent mail by plane between St. Louis and Chicago.

In 1926, Lindbergh became excited when he heard some good news. A rich man said he would give a prize of \$25,000 to the first man to fly alone across the Atlantic Ocean. Lindbergh needed a plane. Some business people from St. Louis gave him the money to make the plane. He called this plane Spirit of St. Louis.

Lindbergh left New York City in his airplane on the morning of May 20, 1927. He arrived in Paris at night the next day. He flew more than 5,800 km in about 34 hours. People around the world read about his exciting flight in the newspapers. He was called "Lucky Lindy" and he became a hero.

Lindbergh wrote a book about his flight across the Atlantic. He named his book *We* because he talked about himself and his airplane. Soon, Lindbergh flew to many cities around America to teach people about airplanes and flying. Later, he flew to and stayed in many countries all over the world, so he became interested in the people and cultures there. Now, many people around the world know about him and his famous flight.

LEVEL 5

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)。

Messages for the Future

Imagine a satellite moving through space, carrying messages and information from millions of people on Earth. If this satellite came back to Earth thousands of years from now, it would be a time capsule -- a source of information that could teach future generations about the past. This image will soon become a reality when the KEO satellite is sent into space in 2003. A French artist, Jean-Marc Philippe, came up with the idea of creating a time capsule that would carry information about the world today. French scientists and engineers are now working on the project.

Anyone can send written messages on any topic for KEO to carry, either by e-mail or regular mail. Special computer disks will be used to record this information and then placed on KEO when it is sent into space. People in over 120 countries have already sent millions of messages in many different languages for the project. This may help people in the future to better understand the variety of languages spoken in the 21st century.

KEO will be sent into space aboard wither a Russian or a French rocket. The satellite will be placed into a 1,800-kilometer-high orbit, and it will probably take KEO about 50,000 years to fall back to Earth. If it does make it safely back to Earth, what will the people of the future think of KEO? We cannot be sure, but one thing is certain -- the technology in 52,003 will be far more advanced than we can even imagine today. The creators of the satellite hope that future generations will be able to learn from KEO about our life in the early 21st century.

LEVEL 6

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

Computer and Chess

The first computer chess program was written by a British mathematician, Alan Turing, in 1950. By 1958, a computer had been built that could beat a human beginner at the game. At the time, many people predicted that within ten years a computer would become the chess champion of the world. But in a match held in 1978, the best chess computer still could not beat an expert. It was not until 1997 that a world chess champion was finally beaten by a computer, and even then many people thought that the computer had just been lucky.

Computer scientists have always been interested in chess computers because they provide a clear way to study how computers "think." But recently some scientists have been studying the brains of human chess players, and they have made a surprising discovery that helps to explain why it was so difficult to develop a computer that could beat a top expert. Scientists at the University of Konstanz in Germany recorded the brain activity of 10 chess expert and 10 chess amateurs as they played against chess computers. By studying the data, they discovered an important difference in the way the brains of the experts and the brains of the amateurs work.

When the amateurs tried to plan their next move in the game, they used a part of the brain that deals with new information. The experts, on the other hand, used the part of the brain in which deep memories are stored. The scientists concluded that expert chess players plan their moves by referring to memories of earlier games. An expert player usually has about 100,000 moves stored in the brain, which can be used to decide how to react to the way an opponent plays. This helps to explain why it took so long to develop a computer that could beat a chess expert. No one knows exactly what gives a person the ability to become a chess expert, but these new discoveries concerning the brain suggest that chess can tell us a lot about human, as well as artificial, intelligence.

LEVEL 7

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

Entrancing Hypnosis

Hypnosis is receiving attention from a growing number of believers and doubters alike. Advocates consider it the ideal remedy for everything from cigarette smoking to labor pains. Skeptics see it as a purposeless pursuit for the naive. But research does indicate that hypnosis offers certain benefits. Scientific studies show that it can be an effective technique for reducing addictions, minor phobias, and attention deficit disorder. Proponents say it is not the hypnotic trance itself that alleviates these conditions, but rather that the suggestions offered to subjects during hypnosis help to alter their behavior and offer relief.

Can anybody be hypnotized? Researchers suggest that the answer is a qualified yes. In fact, they say, it is not a matter of whether a person can be hypnotized, but rather how deeply into a trance they can go. Studies at Stanford University, Virginia Tech, and the University of Massachusetts uncovered a possible link between hypnosis and certain neurological factors. In what is referred to as the "eye-roll" test, measurements were taken to see how far subjects could roll back their eyes when lowering their lids, the ability to roll their eyes correlating strongly with their level of hypnotizability.

Personality characteristics also play a role. The most easily hypnotized subjects are those referred to by experts as "fantasizers." These people tend to be daydreamers and can effectively block out their surroundings. The most extreme fantasizers are those who regularly incorporate daydreams into their routine activities. Fantasizers also tend to have very clear and early childhood memories, and are likely to have had make-believe friends with whom they played. Often, fantasizers had parents who not only encouraged them to engage in imaginary play, but also used imagination tactics to discipline them instead of using a more conventional system of rules and punishments. One fantasizer recalled an incident from childhood where she pushed a little girl to the ground and took her doll. Her mother, instead of punishing her, asked her to imagine how the girl felt. The fantasizer was so clearly able to feel the other child's distress that she never behaved that way again.

In reality, only about 5% of people are believed to be true fantasizers. If you're a daydreamer and you had an imaginary childhood friend, you may be one of these rare ideal candidates for hypnosis. But having even one of the characteristics of a true fantasizer is reason enough to feel lucky. Any such person is likely well suited for the healing power of hypnotherapy.

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

The Genetic Divide

In recent years, tremendous advances have been made in the field of genetics. With the ability to view increasingly complex interrelationship between genes and devise exceptionally accurate tests for predisposition to disease, we can now alert certain individuals to future health problems years in advance of the recognition of symptoms. But while such knowledge holds great promise, genetic testing has potentially adverse effects that could overshadow and even impede future progress.

The science of genetics is widely believed to have originated with Austrian botanist Gregor Mendel, who discovered the principle of the inheritance of physical traits through the combination of genes from parent cells. As genetics evolved, researchers found that the information transmitted from parent to offspring controls more than more physical resemblance. In fact, it plays a part in governing immunity and pinpointing susceptibility to certain diseases and disorders. This is a great step forward in medical science for those who can be treated. Problems arise, however, when we can predict illness in individuals for which there is no known cure.

In October 2000, a British government committee made an announcement that raised precisely such issues. After conducting research into genetic tests for a fatal brain condition known as Huntington's disease, the committee announced that it is now possible to accurately predict which people will suffer from the condition later in life. While these findings were appropriately lauded as a medical breakthrough, the news has significant social implications as well.

Case in point: the life insurance industry. Life insurance is virtual necessity in the U.K. --- it is nearly impossible to make a long-term financial commitment, such as a mortgage, without it. And like any other kind of insurance, it is based upon risk assessment. Diagnostic tests such as the one developed for Huntington's disease could give insurance provides a much greater level of power over the consumer, allowing them to adjust premiums in accordance with test results or even exclude applicants altogether. The National Consumer Council in England has argued that people may actually have to avoid taking genetic tests in order to prevent insurance companies from having the grounds to dismiss their applications. This could lead to an absurd situation whereby people are prepared to go undiagnosed so that they might be covered by insurance.

The issue of genetic prejudice has also reared its head across the Atlantic. Federal government agencies in the Unites States are banned from using genetic information as grounds to discriminate, but private-sector entities are not bound by the same regulations. There is increasing pressure upon the U.S. Congress to ratify the Genetic Nondiscrimination in Health Insurance and Employment Act, which aims to extend such controls beyond the public sector. In the absence of such regulations, sophisticated levels of genetic testing may have the power to create a genetic underclass.

PART 4 「書くこと」

LEVEL 1

- 1 次の単語を正確に書き写しなさい。
picture / baseball / homework
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
「私は兄が二人います」

LEVEL 2

- 1 次の文を正確に書き写しなさい。
Welcome to Japan. Please enjoy your stay.
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
「公園でテニスをしました」

LEVEL 3

- 次の内容を英語で書きなさい。
- ・「ゆうべは家で妹と2時間テレビを見ました」
 - ・「来週の土曜日友達と買い物に行きます」

LEVEL 4

- 次の内容で、3～5文程度で英語の日記を書きなさい（制限時間10分）。
- ・朝雨が降っていたのでバスで学校に行った。数学の授業で先生がたくさん楽しい話をしておもしろかった。午後には雨もやんだので友達と歩いて帰ってきたが、学校に傘を忘れてきてしまった。

LEVEL 5

- 次の内容を、2～3段落の英語（50～80語）で書きなさい（制限時間15分）。
- ・「文化祭」について、期日、内容、見所などをパンフレットで来訪者に伝えなさい。

LEVEL 6

- 次の内容を、3段落以上の英語（150語程度）で書きなさい（制限時間20分）。
- ・日常生活の中で、「伝統文化」の良さについて感じたことを挙げながら、これからも残していった方がよいと思われるものについて述べなさい。

LEVEL 7

- 次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい（制限時間30分）。
- ・クローンについて簡単に説明し、これからの方向性や我々に与える影響などについて自分が思うところを伝えなさい。

LEVEL 8

- 次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい（制限時間60分）。
- ・自分の読書体験を振り返り、「古典」と呼ばれる諸作品の持つ今日的役割について、教育の場と社会生活の場を意識しながら具体例を交えて提言を行いなさい。

P A R T 1 「聞くこと」

LEVEL 1

次の単語を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

chair / lunch / remember / yesterday

LEVEL 2

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

When did you go to America? -- I went there in March.

LEVEL 3

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Kelly likes reading many kinds of books. She reads books about fashion, music and cooking. But her favorite books are about animals.

LEVEL 4

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Bill is leaning to cook. His older sister is teaching him how to make some simple dishes. Yesterday, he made spaghetti for his mother's birthday and she loved it. He also wants to cook for his friends sometime.

LEVEL 5

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Paul has a part-time job as a newspaper boy. Early every morning he takes newspapers to people's homes on his bike. He likes his job, but sometimes he feels very sleepy in the evenings. Last week he even fell asleep at a movie theater and missed most of the movie.

LEVEL 6

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Last Sunday Tom asked two friends to have lunch with him at a French restaurant near his apartment. Tom often goes to the restaurant because it serves tasty food at low prices. When Tom and his friends arrived at the restaurant, however, they discovered that it wasn't open. In the end, they took a taxi to an Italian restaurant downtown and had pizza there.

LEVEL 7

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Dome Homes

For architect Nader Khalili, there's no place like home -- in a dome. Khalili uses either mud bricks or bags filled with dirt to construct alien-looking domes that have caught the eye of architects, environmentalists, and government agencies. His domes are comfortable and often stunningly attractive on the inside. They are easy to build from materials available locally and are amazingly cheap. They are also environmentally friendly.

Khalili first envisioned building ecological housing during an extended motorcycle trip through a desert in the Middle East. A successful architect noted for building high-rise complexes around the world, Khalili listened to the voice of the desert on his journey and realized that he could never go back to building superstructures of steel, asbestos, and other ecologically damaging materials. His domes have already been put to use in such countries as Iraq, where he taught refugees displaced by war to build sandbag domes.

LEVEL 8

次の文を聞いて、理解の程度を「診断表」に記入しなさい。

Frogs

In 1990, ecologists warned that frogs were disappearing from rivers, lakes, and marshes around the world. So far, 32 species have become extinct. Many of the frogs that remain are deformed, missing body parts such as legs, or sprouting other body parts in the wrong places.

So, are frogs leaping toward extinction or are they being pushed?

Scientists have recently suggested a variety of reasons for the decline. These include climate change, contagious diseases, and the continual loss of natural habitat as developers move in.

A paper released in 2002 by biologist Tyrone Hayes pinpoints one of the main culprits for the destruction of frogs. Hayes reported that minute traces of a common herbicide in water are sufficient to disrupt frog hormone secretions. Frogs are especially vulnerable to minute amounts of chemicals in the water because they breathe through their skin.

This explains, for example, why frogs are rapidly disappearing from even protected natural parks like Yosemite, where chemicals are carried by the wind from agricultural areas into frog habitats.

Now, scientists warn, is our last chance to save the frogs before they croak for the last time.

PART 2 「話すこと」

LEVEL 1

次の単語を英語で言いなさい。
「14」「1月」「勉強する」

LEVEL 2

次の対話を完成させなさい。
"I had some milk for breakfast. How about you?" -- "_____."
"What day is it today?" -- "_____."

LEVEL 3

自分の学校を訪れた、海外からの視察者に、次の点について伝えなさい。
「自分の学校はとても古くて伝統がある」
「生徒はみんな勉強と部活動を一生懸命やっている」

LEVEL 4

交換留学生としてカナダから来ているクラスメートに、次の依頼をしなさい。
「来週末に隣町に住む友人が遊びに来るが、あなたに会いたがっているので家に来てもらえないか」

LEVEL 5

次の内容を、友人の留守番電話に入れなさい。
「明日の予定を聞きたくて電話した。自分は映画を見に行くつもりである。このメッセージを聞いたら、メールを送るか、6時から8時の間に電話がほしい。」

LEVEL 6

海外旅行の際に宿泊したホテルのフロント係に、次の内容の問い合わせをしなさい。
「たった今、部屋のドアを開けようとしたら、カードキーが使えなくなっていたので、なぜなのか知りたい。もしこのようなことがこれからもあるのならば、事前に、電話や掲示で知らせて欲しい。」

LEVEL 7

次のうちの1つについて、教室で3～5分間英語のスピーチを行いなさい。
「ボランティア活動の本質について」
「携帯電話の使用マナーについて」

LEVEL 8

次のうちの1つについて具体例を交えて聴衆の前で10分程度の英語のスピーチを行いなさい。
「自然災害を引き起こすメカニズムについて」
「社会における法規制の強化について」
「医療モラルについて」

PART 3 「読むこと」

LEVEL 1

次の単語を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

always / computer / kitchen / November

LEVEL 2

次の文を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい。

- Excuse me. May I ask you a favor?
- My favorite subject is math. It is very interesting.

LEVEL 3

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間2分)。

The Tickets

Daisuke is a junior high school student from Nagoya. He is staying at Mr. White's home in California this summer. Mr. White worked with Daisuke's father, and they are good friends.

Daisuke often talks about sports with Mr. White. Last Friday night, when Mr. White came from work home, he gave an envelope to Daisuke. "Here's something for you," Mr. White said. Daisuke opened it and said, "They're tickets!" "That's right," Mr. White said, "I got two tickets for the baseball tomorrow night!"

The next day, Mr. White took Daisuke to his first major league baseball game. Daisuke was very excited because there were so many people at the game. When he saw his favorite baseball player, Daisuke thought, "I want to be a baseball player, too."

After Daisuke came back to Mr. White's home, he looked at the ticket and thought, "I had a great time today."

LEVEL 4

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)。

The Lady with the Lamp

Florence Nightingale, a British woman, was born in Italy in 1820 and grew up in Britain. Her family was rich and had several large houses in different parts of Britain. Florence didn't go to school, but instead, her father was her teacher at home.

Florence's parents hoped that she would marry and become a good wife and mother. But, at the age of 17, she had a dream about helping other people. Some years later, she decided to become a nurse. Her parents were angry because they thought it was too hard for their daughter. But Florence finally began working as a nurse in 1853 in a small London hospital. She was 33.

Florence enjoyed her job and worked hard. At that time, Britain was in a war. So, in 1854, she traveled to Turkey with 38 other nurses to take care of sick and injured soldiers. She was very kind and friendly to the soldiers, so she soon became very popular. Every night she worked very late. She walked around the hospital with a lamp. So the men called her "The Lady with the Lamp."

Her story later became famous all over Britain and changed many people's ideas about nurses. Before Florence began working as a nurse, hospitals were dirty, crowded places. She bought beds and clothes for the sick people, and started training nurses. With Florence's help, hospitals became better places for everyone. After hearing about Florence Nightingale, many young women wanted to become nurses, too.

LEVEL 5

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間3分)。

Jim Thompson

Jim Thompson, born in the United States in 1906, was known as the "Thai Silk King." Thompson became famous for helping to make Thai silk popular all over the world. Thompson also had a wonderful collection of traditional Thai art that can now be seen at the Jim Thompson House in Bangkok. However, he is best remembered for the mysterious way in which he disappeared.

Over the course of his life, Thompson did several different jobs. He worked as an architect in the United States, but when World War II began he joined the army and went to Thailand. After the war, Thompson decided to stay in Thailand. He had an unsuccessful experience as a hotel manager, and then decided to work in the silk industry. This made him a rich and successful businessman. The high quality of the fabrics he sold became popular overseas, and his silks were even bought by the Queen of Thailand and the Queen of England.

In March 1967, during a visit to Malaysia, Thompson suddenly disappeared in the jungle. He went out for a walk by himself and was never seen again. There was a huge search to find him, but even now no one knows what really happened to Thompson. Some people believe he was shot, while others think he was hit by a truck or that he simply got sick and died in the jungle.

Although his disappearance remains a mystery, interest in Jim Thompson has continued to grow over the years. Stories about him have appeared in magazines, newspapers, and books, and a TV series is being made about his life. Even today, people in Bangkok still ask each other, "What do you think really happened to Jim Thompson?"

LEVEL 6

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

Drifting Continents

It can take a long time for new scientific theories to be widely accepted. Sometimes the truth of a theory isn't recognized until well after the scientist who first proposed it has died. One example is the theory of continental drift, first proposed by Alfred Wegener, which says that today's continents were originally all joined together.

Wegener, a German geologist, began to develop his theory in 1911 after reading scientific papers about the continents of the world. Some of the papers that he read described the discovery of similar plant and animal fossils on opposite sides of the Atlantic Ocean. He became interested in the topic and, while he was looking for other similarities, he noticed that the coastlines of Africa and South America seemed to fit together. After further study, he concluded that about 250 million years ago all the continents had been connected and later separated gradually. He called this original, giant continent Pangaea, which comes from Greek words meaning "the whole earth."

In 1915, Wegener presented his theory in a book called *The Origin of Continents and Oceans*. Unfortunately, his book was not welcomed by the scientific community. At the time, most geologists believed that the continents had been connected by land bridges, and that these bridges had gradually sunk into the ocean. Wegener's idea that the continents were moving apart was considered unlikely, so most geologists simply ignored it. As a result, Wegener was unable to find a job at any German university.

By the time Wegener died, during a research trip to Greenland in 1930, most geologists had completely rejected his theory. However, in the 1950s, scientists started to take it seriously at last. New scientific studies revealed that both the continents and the land beneath the oceans are floating on a "sea" of hot, liquid rock inside the earth. They move at a rate of about 2 cm per year, and this movement causes volcanic activity and earthquakes. This discovery finally confirmed Wegener's idea that the continents had once been linked together and then drifted apart.

LEVEL 7

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

Sea Horses

There's something odd about sea horses. They have been described as "a fish that looks like a horse, with a tail like a monkey, a snout like an anteater, and pouch like a kangaroo." But the strangeness of these tiny undersea creatures is more than skin-deep. For starters, sea horses do not have teeth or a stomach. Their prey -- shrimp, small fish, and invertebrates -- must be sucked in through the snout and digested whole. Sea horses are most peculiar, though, in the area of reproduction. Peculiar may be an understatement: at mating time, it is the male that becomes pregnant. The female plants eggs into a pouch on the male's tail, where he fertilizes them. The male then provides the unborn young with protection, nutrients, and oxygen for up to six weeks before giving birth to as many as 1,500 fully formed and independent sea horses.

Fifteen hundred sounds like a lot, but scientists estimate that an average of just two from each brood survive to maturity -- just enough to keep the population stable. Nevertheless, sea horse numbers are on the decline, partly due to degradation of habitats, but primarily because of the global trade in these creatures that has grown up in recent years. Sea horses are used in traditional medicine, as souvenirs, and as aquarium stock, and total consumption is more than 20 million per year.

The scale of the problem prompted the establishment of Project Sea horse. Launched in 1996 by Dr. Amanda Vincent, the world's foremost sea horse expert, the project takes an enlightened approach to the conservation and management of sea horse populations and their habitats. "No matter how fervent your admiration for any environment, if you want to succeed, you need everybody involved," says Vincent. Project Sea horse attempts to set up partnerships with the traditional-medicine community, aquarium operators, policy-makers, and fisheries departments. Sea horse fishers are being provided with management skills in a bid to restore wild-sea horse stocks. Under a trial program, the fishers place any pregnant males they catch in underwater cages until their young are born. The fathers are then sold, allowing the fishers to maintain their income and the sea horse population to stabilize. "If conservation isn't economically sustainable for a community," says Vincent, "it's not going to work."

Sea horses may represent the ideal vehicle for promoting new approaches to conservation. They live in some of the world's most important and most threatened habitats. But more importantly, their peculiar appearance makes them instantly recognizable, which in turn makes it easier for people to embrace their cause. In the end, it may be the oddness of sea horses that saves them from an increasingly ordinary fate: extinction.

次の文章を読んで、理解度を「診断表」に記入しなさい(制限時間4分)。

New Visions of Utopia

Utopias, those idealized societies that wholly fulfill human and social needs, have long captured the human imagination. They offer us dreamlike glimpses of a more perfect world and of better lifestyles. Yet few nations have tried wholesale transformation based on utopia ideals, and those attempts have ended in disaster and social fragmentation. It is not difficult to see why: while everyone can agree on the idea that happiness is good, few can agree about how to build a society that engenders happiness. Conflict is the inevitable result of large-scale social engineering projects, and efforts to reduce conflict and dissent often lean toward totalitarian control. Proponents of even the most practical social betterment proposals find that they meet more success when shying away from classical images of utopia and even avoiding the word altogether.

Classical utopian ideas are fading, and rightly so. Efforts at betterment need to be based on more practical considerations and informed scientific findings. That's why proponents of social betterment are reducing their aims from large-scale change to single-sector proposals. Society has simply become too unwieldy, complex, and fragmented to make holistic changes. It is far easier, and more beneficial in the long term, to make improvements in targeted sectors such as the economy, health, welfare, education, and the environment.

This is not to say that utopia thinking is dead. It has evolved into something new. Positive visualization was at first a technique used athletes who were preparing for competition, but is now a technique widely employed by corporate executives. "Having a vision and being a realistic visionary are absolute necessities for functioning as a rational human being," writes Tsvi Bisk, founder of the Strategic Educational Planning Institute. "Human society absolutely requires visions of where it wants to go." Ideal future societies have become a topic of serious research for scholars and activists, especially those working in think tanks and interest groups. Perhaps the most profound change in betterment thinking is its shift away from the public sector to the private sector. Many new utopian works in the last decade have focused on the ideal corporation, and a number of betterment proposals include government and private-sector collaboration.

Utopias will always have a place in the classroom, primarily as a study of human values. Vivian Rosenberg, professor of humanities at Drexel University, says, "The challenge in teaching a utopias course is to find a way to navigate between naive dreams, dogmatic and unexamined beliefs, cynicism, and the impulse, so rampantly encouraged in our culture, to escape to personal, selfish, and usually materialistic pleasures." Any discussion of utopia must be balanced with human nature and the demands of reality.

PART 4 「書くこと」

LEVEL 1

- 1 次の単語を正確に書き写しなさい。
message / scientist / together
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
「今日はとてもいい天気です」

LEVEL 2

- 1 次の文を正確に書き写しなさい。
Could you tell me the way to the station?
- 2 次の日本語の内容を英語で書きなさい。
「昨日横浜に買い物に行きました」

LEVEL 3

次の内容を英語で書きなさい。

- ・「普段は6時頃帰宅し、夕食は7時頃に家族と一緒に食べます」
- ・「来年の夏に、熊本の叔父の家に行って、近くの海で釣りがしたい」

LEVEL 4

次の内容で、海外の友達に3～5文程度で英語のメールを書きなさい(制限時間10分)。

「毎日寒い日が続いている。今冬休みで、明日家族でスキーに行く予定である。もうすぐ新年を迎えるが、そちらではどんなことをして過ごすのか知りたい。」

LEVEL 5

次の内容を、2～3段落の英語(50～80語)で書きなさい(制限時間15分)。

- ・ホームステイの体験について、最初の不安、ホストファミリーの親切な対応、楽しい日々、学校での友人との交流、帰国時の別れの悲しさ、などを時間の流れに従って

LEVEL 6

次の内容を、3段落以上の英語(150語程度)で書きなさい(制限時間20分)。

- ・先週見に行った映画について、俳優の演技がすばらしく、ストーリー展開も意外性があり、せりふ回しもすぐれていて楽しめた。しかし、音楽の効果が今ひとつであった、という趣旨の感想

LEVEL 7

次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい(制限時間30分)。

- ・草の根レベルでの有意義な国際理解と国際交流について、実体験を交えながら、あるべき姿についての提言を行いなさい

LEVEL 8

次の内容を、できるだけ多くの英語で書きなさい(制限時間60分)。

- ・男女共同参画社会について、欧米と日本の歴史的背景を体系立てた後に、日本での現状を述べ、今後を展望しなさい

【補充資料3】高等学校英語 の指導と評価の計画（評価規準）

教科目標		日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。			
評価の観点及びその趣旨		関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
		コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	日常的な話題について、情報や考えなど伝えたいことを英語で話したり、書いたりして表現する。	日常的な話題について、英語を聞いたり、読んだりして、情報や考えなど相手が伝えようすることを理解する。	日常的な話題についての英語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともにその背景にある文化などを理解している。
学年の評価の観点の趣旨		コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
内容のまとめりことの内容の学習内容					
聞くこと	言語活動	「聞くこと」の言語活動に積極的、主体的に取り組んでいる。さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを主体的に続けようとしている。		日常的な話題についての英語を聞いたり、情報や考えなど相手が伝えようすることを正確に理解することができる。 日常的な話題についての英語を場面や目的に応じて適切に聞きとることができる。	言語や言語の運用についての基本的な知識を身に付けている。 日常的な話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。
	評価規準の具体例	（言語活動への取り組み） ・相手を見て話を聞いたり、必要に応じてメモを取るなど、相手の話に関心をもっている。 ・聞いたことについてジェスチャーや簡単なことばで応答したりしている。 ・聞いた内容について意見や感想を述べようとしている。 （コミュニケーションの継続） ・理解できないところがあっても、推測するなどして聞き続ける。 ・理解できないとき、確認したり、繰り返しや説明を求めたりしている。	（正確な聞き取り） ・リズムやイントネーションなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ることができる。 ・聞いた内容について正しく理解することができる。 （適切な聞き取り） ・聞いた内容について概要や要点を把握することができる。 ・さまざまな口調や速度で話されたり読まれたりする英語の内容を聞きとることができる。	（言語についての知識） ・連音や音変化などを聞き分ける知識がある。 ・場面や状況による強勢やイントネーションの違いを理解している。 ・場面や状況に応じた表現を知っている。 ・「聞くこと」に用いられる語句や文法を知っている。 （文化についての知識） ・ジェスチャーなど非言語的なコミュニケーション手段の役割や用い方を理解している。 ・日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。	
読むこと	言語活動	「読むこと」の言語活動に積極的、主体的に取り組んでいる。さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを主体的に続けようとしている。	日常的な話題についての英語を正しく音読したり暗唱したりすることができる。 日常的な話題についての英語で書かれた内容が表現されるように適切に音読したり暗唱したりすることができる。	日常的な話題についての英語を読んだり、情報や考えなど書き手の伝えようすることを正確に理解することができる。 日常的な話題についての英語を場面や目的に応じて適切に読みとることができる。	言語や言語の運用についての基本的な知識を身に付けている。 日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。
	評価規準の具体例	（言語活動への取り組み） ・必要に応じてメモを取るなど、読んでいる内容に関心をもっている。 ・読んだ内容について意見や感想を述べようとしている。 ・必要に応じて辞書などを活用している。 ・音読や暗唱に積極的に取り組んでいる。 （コミュニケーションの継続） ・理解できないところがあっても、推測するなどして読み続けている。	（正確な音読） ・正しいリズムやイントネーションなどを用いて、音読したり暗唱したりすることができる。 （適切な音読） ・文章の意味や作者の意向などを考えて適切に音読したり暗唱したりすることができる。	（正確な読みとり） ・書かれた内容について概要や要点を把握することができる。 ・文や文章を目的に応じた適切な速さで読みとることができる。 （適切な読みとり） ・読んだ内容について概要や要点を把握することができる。 ・文や文章を目的に応じた適切な速さで読みとることができる。	（言語についての知識） ・場面や状況による強勢やイントネーションの違いを理解している。 ・場面や状況に応じた表現を知っている。 ・文章の流れについての知識がある。 ・「読むこと」に用いられる語句や文法を知っている。 （文化についての知識） ・日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。
話すこと	言語活動	「話すこと」の言語活動に積極的、主体的に取り組んでいる。さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを主体的に続けようとしている。	日常の話題について英語で情報や考えなどを正しく話すことができる。 日常の話題について、場面や目的に応じて適切に話すことができる。		言語や言語の運用についての基本的な知識を身に付けている。 日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。
	評価規準の具体例	（言語活動への取り組み） ・間違っことを恐れず自分の考えなどを話している。 ・言語活動において、自ら学んだ表現や進んで集めた情報などを使って話している。 ・ペア・ワークやグループ・ワークなどにおいて積極的に話し合ったり意見の交換をしている。 （コミュニケーションの継続） ・うまく言えないところがあっても、別の語句や表現で言い換えたり、説明して伝えるなどの工夫をしている。 ・つなぎ言葉を用いるなど、不自然な沈黙をせず話し続けている。	（正確な発話） ・正しいリズムやイントネーションなどを用いて、話すことができる。 ・文法に従って正しく話すことができる。 ・伝えたい情報や考えなどを正確に話すことができる。 （適切な発話） ・伝えたい内容、場面、相手、目的などに応じて語句や表現を選択し適切に話すことができる。 ・相手の発話に対して適切に回答することができる。 ・場面や目的に応じて適切な速さや声の大きさを話すことができる。 ・相手の理解を確認しそれに応じて話すことができる。	（文化についての知識） ・ジェスチャーなど非言語的なコミュニケーション手段の役割や用い方を理解している。 ・日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。	
書くこと	言語活動	「書くこと」の言語活動に積極的、主体的に取り組んでいる。さまざまな工夫をすることで、コミュニケーションを主体的に続けようとしている。	日常の話題について、得た情報や自分の考えを正しく書くことができる。 日常の話題について、場面や目的に応じて、英語で適切に書くことができる。		言語や言語の運用についての基本的な知識を身に付けている。 日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。
	評価規準の具体例	（言語活動への取り組み） ・間違っことを恐れず自分の考えなどを書いている。 ・自ら学んだものを読み直し、意欲的に書き直したりしている。 ・自ら学んだ表現や進んで集めた情報などを使って書いている。 ・必要に応じて辞書などを活用している。 （コミュニケーションの継続） ・よりうまく伝えるように、別の語句や表現で言い換えたり、説明して伝えるなどの工夫をしている。 ・表現できないところがあっても知っている語句や表現を用いて書き続けている。	（正確な筆記） ・文法に従って、正しく書くことができる。 ・伝えたい情報や考えなどを正確に書くことができる。 （適切な筆記） ・内容を整理し、必要な分量を書くことができる。 ・伝えたい内容、場面、読み手、目的などに応じて、語句や表現を選択し適切に書くことができる。 ・文のつながりや構成を考えた文章を書くことができる。	（言語についての知識） ・文字や符号などを使い分ける知識を身に付けている。 ・場面や状況に応じた表現を知っている。 ・文章構成についての知識がある。 ・「書くこと」に用いられる語句や文法を知っている。 （文化についての知識） ・日常の話題について、英語の学習で取り扱われた文化について理解している。	

英 語 活 動 評 価 表

実施日： 月 日	年 組 番 氏名
----------	----------

	評 価 項 目	自己評価	相互評価	教科担任評価とコメント	
聞くこと	・聞いた内容の要点を理解する	3 2 1	3 2 1	} 3 2 1	
	・関心をもって、相手を見て話を聞く	3 2 1	3 2 1		
	・理解できない部分も推測して聞く	3 2 1	3 2 1		
	[評価の平均]				
話すこと	・間違いを恐れず自分の考えを話す	3 2 1	3 2 1		
	・学んだ表現を進んで使って話す	3 2 1	3 2 1		
	・正しい文法やリズムで話す	3 2 1	3 2 1		
	[評価の平均]				
読むこと	・正しい発音で音読や暗唱をする	3 2 1	3 2 1		} 3 2 1
	・必要に応じて辞書を活用して読む	3 2 1	3 2 1		
	・理解できない部分を推測して読む	3 2 1	3 2 1		
	[評価の平均]				
書くこと	・間違いを恐れず自分の考えを書く	3 2 1	3 2 1		
	・学んだ表現を用い辞書も活用して書く	3 2 1	3 2 1		
	・書いたものを読み直したり書き直す	3 2 1	3 2 1		
	[評価の平均]				

* 評価の基準は [3] どちらかといえばできた
 [2] どちらともいえない
 [1] どちらかといえばできなかった

* まとまった期間内の活動を自己評価し、相互評価や教科担任の評価も活用しながら、達成できた活動や不足している活動を確認し、以後の学習の目標としよう。

英語活動評価記録表

年 組 番 氏名

実施日	項目	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	教科担任	今回の反省と次回までの目標	検印
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							
/	自己							
	相互							

* 教科担任から返却の後、各項目の平均を記入し、各自保管する。

* 「次回への目標」を簡潔に記入し、努力目標とする。

英 語 力 診 断 表

実施日： 月 日	年 組 番 氏名
----------	----------

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	目安
レベル1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	
レベル2	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	5級
レベル3	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4級
レベル4	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	3級
レベル5	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	準2
レベル6	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	2級
レベル7	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	準1
レベル8	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	1級
レベル9	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	

* 各評価の基準は [4] 完全にあるいはほとんどできる

[3] 半分以上はできる

[2] 半分まではできない

[1] 全くあるいはほとんどできない

* 目安は英語検定のレベルに対応させたものであり、おおむね該当の全項目が [4] であれば相応の力があることを示す。

* 自己診断（英語熟達度）の材料として用い、自分が現時点でどのレベルにあるかを測り、次への目標設定の材料とする。

私 の 英 語 力 の 目 標

【補充資料6】「私の英語力の目標」記述例

技 能	聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く力と話す力をつけて将来何かの役に立つような英語力をつけたい。 ・外国人の会話内容のたいたいを理解できるようになりたい。 ・海外の映画やドラマを字幕なしで聞けるようになりたい。
	話すこと	<ul style="list-style-type: none"> ・とにかく話せるようになりたい。 ・道を聞かれた時にすぐ教えられるくらいの力をつけたい。 ・考えなくてもすぐ英語で返事ができるようになりたい。 ・卒業までには自己紹介、道案内、電話対応等日常生活の英語がすらすら正確に話せるようになりたい。 ・外国人と会話をして笑いあえるようになりたい。 ・ガイドなしで海外に行って自分の英語力だけで生活したい。 ・英会話教室に通っているので、日常会話ぐらいは完璧にできるようになりたい。 ・電話などで自分のことを伝えられるようになりたい。 ・話すことで発音をうまくしたい。 ・一般的な事柄を説明し簡単な通訳ができるようになりたい。
	読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を早く読めるようになりたい。 ・洋楽の歌詞が訳せるくらい読めるようになりたい。 ・長文を読めないし長い文章を作れないので練習していきたい。 ・洋書を何でもいから一冊読めるようになりたい。 ・簡単な新聞記事やパンフレットを読んで理解できるようになる。
	書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・読み書き、特に長文を書けるようになりたい。 ・文の構成を考えて書けるようになりたい。 ・自分が思ったことや感想が書き表せるようになりたい。 ・簡単な英語の日記が書けるようになりたい。 ・外国人と簡単なメールのやりとりをしたい。
	語彙	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさん単語を覚えて文章で活用できるようになりたい。 ・話すことのできる語彙が少なすぎるので、たくさん単語を覚えたい。 ・書いて単語をたくさん覚えたい。 ・模試に対応できるだけの語彙力をつけたい。 ・わからない単語が出てくると全体の意味がわからなくなるので、使える単語を増やす。 ・読むことは2級あたりから全然わからなくなるので単語からしっかり覚える。
	文法	<ul style="list-style-type: none"> ・文法を覚えていろいろな訳し方ができるようになりたい。 ・文法をよく理解して自分の考えを話したり書いたりできるようになりたい。
関心 意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・授業・家庭学習とももっと集中したい。 ・復習をしっかりやりたい。自分から進んで英語の勉強をしていきたい。 ・英字新聞を読んでいこうと思う。 ・英語は大嫌いなので、「嫌い」くらいにはなりたくない。 ・基礎をしっかり学び、日常に関する英語を理解したい。 ・あらゆる面で日頃から勉強していきたい。 ・力を付けるためにはもっと家庭学習が必要だと思えないので心がけたい。 	
資格 取得	<ul style="list-style-type: none"> ・目安5級が全部4になるようにしたい。4級も4を目指したい。 ・卒業までに2級をとりたい。 ・1年生のうちに準2級をとりたい。 ・今年中に3級をとりたい。 ・中2までに3級をとったので、高校では準2級、2級、できれば準1級に挑戦したい。 ・準2級までは完璧にしたい。 ・自分はレベル4あたりなので、2つ上げたい。 	

【補充資料7】調査紙（教師用）

ア ン ケ ー ト（教師用）

「英語力の目標」（11月実施分）についてご意見をお聞かせください。

1. 「英語力の目標」を実施することに意義を感じますか
 ア 大いに感じる イ まあまあ感じる ウ どちらとも言えない
 エ どちらかといえば感じない オ 全く感じない
2. [1] の各項目を選んだ理由をお聞かせください

* 以下の質問は、[1] で、ア～ウを回答した方のみお答えください。

3. 設定レベルと問題の難易度について（レベルにふさわしい問題であったか）

- | | | |
|---------|------------|---|
| （1）聞くこと | ア 難しい（レベル名 | ） |
| | イ 適当 | |
| | ウ 易しい（レベル名 | ） |
| （2）話すこと | ア 難しい（レベル名 | ） |
| | イ 適当 | |
| | ウ 易しい（レベル名 | ） |
| （3）読むこと | ア 難しい（レベル名 | ） |
| | イ 適当 | |
| | ウ 易しい（レベル名 | ） |
| （4）書くこと | ア 難しい（レベル名 | ） |
| | イ 適当 | |
| | ウ 易しい（レベル名 | ） |

4. 実施時期と実施方法について
- （1）実施時期（8月末）について
- | | |
|-----------------|---|
| ア 早い（理由及び適当な時期： | ） |
| イ 適当 | |
| ウ 遅い（理由及び適当な時期： | ） |
- （2）実施方法（授業中・教科担任による実施・自己申告制）について
- | | |
|-----------|---|
| ア この方法でよい | ） |
| イ 改善が必要 | |
| （改善策： | |

5. 生徒の英語力育成について
- （1）「英語力の目標」は生徒の英語力育成において効果があったと思いますか
- | | | |
|--------|-------------|-----------|
| ア そう思う | イ どちらとも言えない | ウ そうは思わない |
|--------|-------------|-----------|
- （2）1の質問で[ア]と回答した方のみ回答してください
 どのような点で効果がありましたか（複数回答可。「その他」は記述をお願いします）
- | | |
|------------------|---|
| ア 授業に集中するようになった | ） |
| イ 予習・復習等学習時間が増えた | |
| ウ 学習への関心・意欲が増した | |
| エ 質問の機会が増えた | |
| オ 考査や模試の成績が向上した | |
| カ その他[|] |

6. 「英語力の目標」についてその他お気づきの点（改善点）等がありましたらご記入ください。

「自己評価表」についてご意見をお聞かせください。

1. このような評価（技能・観点別に継続的なフィードバック）をすることに意義を感じますか。
ア 大いに感じる イ まあまあ感じる ウ どちらとも言えない
エ どちらかといえば感じない オ 全く感じない

2. [1] の各項目を選んだ理由をお聞かせください

--

* 以下の質問は、[1] で、ア～ウを回答した方のみお答えください。

3. 様式・項目について

- (1) 今回の評価内容（4技能の観点別評価）について

- ア この内容でよい
イ 項目が多すぎる（削除すべきもの：)
ウ 項目が少なすぎる（追加すべきもの：)

- (2) 評価者について

- ア 自己・相互・担任の3者でよい
イ 自己評価のみがよい
ウ 自己評価と相互評価がよい
エ 自己評価と担任評価がよい
オ 教科担任評価のみがよい
カ その他 ()

- (3) 評価の段階（3段階）について

- ア 3段階でよい
イ 4～5段階がよい
ウ 2段階がよい

- (4) 評価の回数について（今回の実施期間に比して）

- ア 多すぎる（理想的な回数：)
イ 適当
ウ 少なすぎる（理想的な回数：)

4. 仕事への負担について

- ア 負担が大きく継続は困難
イ 負担はあるが継続は可能
ウ それほど負担は感じない
エ その他 ()

5. 生徒の英語力育成について

- (1) 「自己評価」活動は生徒の英語力育成において効果がありましたか
ア そう思う イ どちらとも言えない ウ そうは思わない

- (2) 1の質問で[ア]と回答した方のみ回答してください
どのような点で効果がありましたか（複数回答可。「その他」は記述をお願いします）

- ア 授業に集中するようになった
イ 予習・復習等学習時間が増えた
ウ 学習への関心・意欲が増した
エ 質問の機会が増えた
オ 考査や模試の成績が向上した
カ その他 []

6. 今回の評価活動を実施して、授業や評価等に関して以下に該当するものがあればお選びください

- ア 生徒の活動状況をより注意深く観察した
イ 評価活動を指導改善により生かした
ウ 単元ごとの指導目標をより明確に立てた
エ その他 ()

7. 「自己評価」についてその他お気づきの点（改善点）等がありましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました

アンケート（無記名）

1. 「英語力の目標」「自己評価・相互評価」の実施（8月末）以前と以後で英語学習の状況に変化はありましたか。
(1) はい (2) いいえ (3) わからない
2. [1] で、「はい」と回答した人だけ教えてください。
どのような変化がありましたか。該当するものを下から 2 つまで選んでください。「その他」は具体的に記述をお願いします。
(1) 英語の学習時間が増えた
(2) 授業により集中するようになった
(3) 目標を定めて学習するようになった
(4) 学習への関心・意欲が増した
(5) わからないことを質問するようになった
(6) 周囲の学習状況がよく見えるようになった
(7) その他 []
3. 自分の「英語力」は伸びた、あるいは伸びつつあると思いますか。
(1) はい (2) いいえ (3) わからない
4. [3] で、「はい」と回答した人だけ教えてください。
どのような場合に力が伸びた（伸びつつある）ことを感じますか。該当するものを 2 つまで選んでください。「その他」は具体的に記述をお願いします。
(1) 聞く力がついてきた（テープやCDの英語が以前より聞き取れるようになった）
(2) 話す力がついてきた（伝えたいことを話せるようになってきた）
(3) 読む力がついてきた（教科書などを読んでよりよく理解できるようになってきた）
(4) 書く力がついてきた（伝えたいことを的確に書けるようになってきた）
(5) 考査や模試の成績が向上した
(6) 「英語力の目標」の点数が前回よりよくなった
(7) その他 []
5. [3] で、「はい」と回答した人だけ教えてください。
力が伸びた要因はなんだと思いますか。該当するものを 2 つまで選んでください。「その他」は具体的に記述をお願いします。
(1) 「英語力の目標」による目標の設定等
(2) 「自己評価・相互評価・教科担任評価」による意識の変化等
(3) 進路目標等、自分自身の意欲・目標
(4) 面談・ガイダンス等による意識付け
(5) 考査や模試等の結果による意欲の喚起
(6) その他 []
6. 今後も「英語力の目標」や「評価活動」を継続したいと思いますか。
(1) 「英語力の目標」は定期的に継続してやりたい
(2) 「評価活動」は定期的に継続してやりたい
(3) 「英語力の目標」と「評価活動」の両方とも継続してやりたい
(4) わからない
(5) どちらもやりたくない
7. [6] の各項目を選んだ理由を簡潔に記入してください
8. 「英語力の目標」「評価活動」について、その他気付いた点や意見があったら自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。